
召喚師の旅路

杉村祐介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

召喚師の旅路

【Zコード】

Z2029R

【作者名】

杉村祐介

【あらすじ】

召喚師、それはカードに封印された魔獣を呼び出せる特殊な種族。

ひょんなことから、召喚師サモンと少女リトルは出会い。

魔法王国の騎士ジン、サモンとは別のカードを持つ青年トランス…

二人は出会いを繰り返しながら、世界各地を旅していく。

愉快な冒険ファンタジー！！

* 一言感想、酷評、なんでもお待ちしております！

少女と竜と召喚師

「じゃあ、元気でな」虫の音が聞こえる闇夜の森に、一人の少年が向かい合っていた。月を隠していた雲は風に飛ばされ、互いに相手の表情が確認できるようになる。一人とも髪は夕日のような橙色に染まり、目は炎のような赤い色をしていた。似たような顔立ちの二人だったが、身長は10cmほど開いていた。

「兄ちゃん！」

「心配するなサモン、俺には仲間がいる」

兄ちゃんと呼ばれた身長の高い少年は、ポケットから一枚のカードを取りだす。それを横にゅっくり振ると、少年の後ろにうつすらと影が一つできた。一方は黒いマントと田の下辺りまで隠すフードを身につけ、不適な笑みを浮かべる男。そしてもう一方は、太い足を大地につけ、両肩の翼を揺らしている紅い竜。

「でも、でも！」

サモンと呼ばれた少年は、泣きそうになるのをこらえて訴える。自分がどれほど心配しているかを。自分も力になりたいということを。

だが兄は、頭を優しくなぐる事しかできなかつた。自分に課せられた使命を、命を懸けても果たさなければならない。それは運命でもあり、呪いでもある。

「サモン……」

兄は一枚のカードの片方を、弟に渡した。さつきまで彼の後ろにいた竜は、闇に溶けるように消えた。少年は涙で潤んだ目をこすりながら、兄の最後であらう言葉を受け取る。

「俺の分身だと思って持つてろ。これで怖くないだろ？」

兄から渡されたカードの中央には、先ほどまでいた紅い竜の絵が描かれていた。少年が小さくなづくと、兄は悲しげに笑顔を作り、

背中を向けてゆっくりと歩き出す。

「オレ……絶対旅に出るから！」

少年は背中を向けた兄に叫んだ。

「旅に出るから！ 兄ちゃんを助けに行くから……」

兄は何も答えなかつた。少年は、兄の姿が見えなくなるまで叫び続けた。右手のカードの温もりを感じ取りながら……。

馬車がぎしぎし音を鳴らして森の道を進む。時折聞こえる鳥のさえずりや、甘い花の香りを持ってきたそよ風が気持ちいい、と彼女は思った。だがそれも、隣にいる筋肉質な男のいびきで台無しだが……。

彼女はリトル。長い茶髪をポニー テールにくくくり、黒い瞳はキラキラ輝いている。顔立ちも良く、俗にいう「可愛い」少女だ。リトルは青い布製のシャツとミニスカートに、上から戦闘用のベストを着て、腰には愛用の銃二丁を下げている。数年間の間、自分の命を守ってくれている相棒だ。

リトルは人々が町から移動するとき、魔獣の脅威から命を守る護衛職というのについていた。今日も馬車の中に乗っている下級貴族を護衛しているのだが、たいてい何も起きずに仕事は終わる。その割に給料は高額なところが、彼女がこの職についた一番の理由だ。

今彼女は、馬車の中ではなく後ろについた出っ張りの部分に、見知らぬ男二人と腰を下ろしていた。真ん中にイビキをかけて眠っている男が、その両脇にヒヨロツとした男とリトルが座っていた。

「どこかに新しい出会いでもないかな」

彼女は17歳。青春真っ盛りの年頃である。それなのになぜ暑苦しい男の隣で過ごさなければならないのか。もたれかかつて来る男を反対側に押し返すと、もう一人のひょろつとした男は巨体に押しつぶされてしまった。

馬車はゆっくりと、森の道を進む。

すると道の途中で、オレンジ色の草が見えた。それを注意していくと草ではなく、道端で倒れている、リトルと同じくらいの歳の少年だった。

リトルは軽い身のこなしで馬車から飛び降りると、倒れている少年に駆け寄った。馬車の運転手は彼女が降りたことに気付き、手綱を引いて馬車を止める。

「大丈夫？ けがでもしたの？」

リトルの言葉に、少年の返事はない。だが代わりに少年のお腹が大きく鳴つた。彼女はホッと一安心すると、馬車の運転手に話しかけた。

「私、あの人看病してから行きます」

「魔獣は大丈夫なのか？」と運転手は言つたが、リトルは笑つて返事した。

「後ろで寝ているあの人達も、ただの飾りじゃないんですから」
その言葉に、運転手は納得がいかない顔をしていた。まあイビキ男とヒヨ口つとした男の二人組じやあ、不安にならない方がおかしいのだが、リトルの説得にしぶしぶ馬車を進めた。

リトルは少年に駆け寄り、自分のカバンから弁当……おにぎり三つを出した。

「さあ、これ食べて」

彼女はその弁当を少年に渡すと、自分はおやつの乾パンを口にほうり込む。少年は目の前にあるものが食べ物だと理解すると、体を飛び上がらせて食事を始めた。

「あなた、名前は？」

勢いよくがつついでいる少年に質問するが、返事はない。リトルはあきれた顔で座り込み、三角座りで食事が終わるのを少し待つた。

「いやー、ありがとな！」

オレンジ髪の少年はニッコリと笑つて言つた。リトルの弁当は全部彼の腹に入つてしまつた。

「オレ、サモンっていうんだ」

「私はリトル」

彼女はさらつと自己紹介を済ませると、サモンの格好をまじまじと見つめた。オレンジの髪に赤い瞳、そして腰の左側には不思議な魔力を感じる剣が下げられていた。さらにリトルより背が低い事から、年下と思われる少年が、敵に囮まれやすいこの森を、一人で移動するのはかなり危険な事だ。この森を抜けるには、大人でも一人は必要だつた。

そんな考察をしている最中、サモンが口の回りについたご飯粒を、つまんで食べながら言つた。

「弁当、手作りなのか？」

「あ、うん」

彼女は「よく氣づいたなあ」とサモンのことを内心讃めながらも、馬車とあまり離れたくなかったので、無駄な話はしないように心がける。

「じゃあ近くの町まで送るから、ついてきてくれる？」

サモンは素直にOKを出してくれたので、一人は馬車を追いかけることにした。

「しつかし」

「どうかした？」

森の道を走つてゐる途中、サモンは鼻をヒクヒクさせて言つた。

「さつきから魔獣の匂いを追いかけてるみたいな気がするんだよな

……」

その言葉に、リトルは馬車が襲われていることを直感的に感じた。

今までサモンにあわせて動かしていた足を、さらに速く動かした。

「おい、待てって！」

サモンは全力で走つて追いついたが、あまりの速さにビビん
どん距離が離されていく。

リトルは風を纏うよつて、ぐんぐんと進む。

森の中にある、少し開けた場所に馬車は止まっていた。車輪は攻
撃を受けて壊れ、破片が辺りに散らばっている。馬車の回りには狼
が十数匹くるくる回つて、襲撃のチャンスを伺つていた。今のところ
はイビキ男とヒヨロイ男の二人がしのいでいるようだが、二人共
限界に近かつた。

「ごめんなさいっ！」

横から銃弾と共にリトルが突つ込み、数匹の狼をけちらす。

「依頼主は！？」

リトルの問いかけに、イビキ男が馬車を指差した。運転手と一緒に
隠れている見たいだ。安心した彼女は両手の銃を構え、一人の同
業者を鼓舞した。

「さあ、反撃するわよ！」

リトルは次々と銃で撃ち倒し、イビキ男は手斧を振り回した。ヒ
ヨロイ男は杖を出して、攻撃魔法を放つ。三人は馬車から離れつつ、
次第に狼の群れを倒していく。だがその状態も長くは続かなかつた。
「ガルルル！」

ヒヨロイ男の横から、魔獣の太い鳴き声が聞こえた。と同時に彼
は何かにぶつ飛ばされ、空中で三回転したあと地面に激突する。

現れたのは、今までの狼より一回り大きい体つきの、銀白の毛を
した魔獣だつた。そいつが大きく雄叫びを上げると、今までやられ
っぱなしだつた小さな狼たちの動きが変わつた。より俊敏に、狡猾
に、彼女たちに襲いかかる。

イビキ男は銀白の狼に斧を向けて、力一杯振りおろした。だが狼
は自分に当たる直前で、前足で払いのける。その一撃で自慢の斧は

真つ二つに砕けた。

「なに、こいつ……」

リトルは初めて見る魔獣の、圧倒的な力に驚いた。ボスは目の前の男を突き飛ばすと、鋭い眼を彼女に向かた。そして、部下の復讐という意味だろうか、狩りの獲物を仕留める喜びからか、怒りと笑みを顔に浮かべながら、牙をむき出しにして突進してくる。リトルは攻撃をかわそうと思つたが、体が恐怖で動かない。

やられる……そう思つたその時。

「まつたああああっ！！！」

青い空から声が聞こえた。声の主はリトルの目の前に降り立ち、右手の剣で狼の鼻を一閃する。魔獣は悲鳴を上げ、血が吹き出している鼻を抑えながら悶えた。

オレンジの髪が風に揺れる。少年は後ろを振り向いて笑つて言った。

「やつと見つけた！」

「サモン！？」

少年の後ろでペターンと座り込んでいるリトルは、頭の上にマスクを浮かべたような顔をしていた。

「あなた、空飛べるの……？」

サモンは背中を向けながら首を横にふる。そして左手をポケットに突っ込んだ。

「オレには、空飛べる仲間がいるんだ！」

ポケットから左手が出る。その手には五ミリほどの薄い板……いや、分厚いカードが、持ち主の瞳のように赤く輝いている。そして、中心には回りの赤よりさらに「紅い」竜の姿が描かれていた。初めて会つた時に感じた不思議な魔力は、剣ではなくこのカードが出ていたものだつたと、リトルはこの時気付く。

「いくぜ、ディノ！！」

サモンは叫びと共に、カードを上から下に振りおろす。するとカードの絵から魔獣が飛び出したかのように、描かれていた紅い竜が、

少年の横に姿を見せる。

屈強な後ろ足で地面に立ち、翼を広げて威風堂々としている。体長はサモンと同じくらいだったが、開いた翼がさらに大きく見せる。長く美しい尻尾がゆれ、その先には白いトゲがある。どれも真紅の鱗に包まれて、まるでこの魔獸そのものが一つの炎のようだ。

「グオオオ！」

少年と同じくらいの大きさの「炎」は、咆哮したあと翼を使って空へ向かう。そして銀白の狼に向かつて、火炎弾を口から出した。狼は寸前でかわし、雄叫びをもう一度上げる。一度田とは違う感じのそれは森に響きわたった。

サモンは戦いを紅い竜に任せ、イビキ男を叩き起し、ヒヨロイ男を担いで数十メートル離れた馬車に運んだ。

「リトル、なにボケッとしてるんだよ！」

馬車に男を乗せた彼は、リトルの近くへ行く。そして、サモンの登場から半ば放心状態だったリトルを、軽々と抱き上げた。

「ちょ、何するの！？」

「いいから黙つてろつて」

サモンはカードを、紅い竜に向ける。すると竜は吸い込まれるように元の居場所へ帰つていった。

「んだからもう一度つ！」

彼はまたカードを振る。竜紅い竜は解放されると同時に、翼を大きく羽ばたかせた。空へ飛び立つ直前に、サモンは担いでいるリトルと一緒に、竜の尻尾にしがみつく。そして竜は馬車を前足でつかむと高く高く昇つていった。

地上では、さつきの狼の仲間がやつて来て、空に向かつて吠えている。その数は五十匹くらい集まつていて、あの場所で戦つていたら確実に負けていただろう。

「サモン、この事わかつたの？」

リトルの質問に、彼は答えなかつた。ただ声を出して笑つて空を

見ていた。

しばらくして彼らは、近くの町に着陸した。馬車をおひした竜はカードに戻つていった。

「君、仕事をやめるとはどうこう精神なんだ！」

怒鳴つているのは、馬車に乗つっていた貴族、今回の依頼主だ。スー^ツ姿にちょび髭をはやした貴族は、リトルに怒りをぶつけていた。

「本当にすみません！」

彼女は自分のせいでピンチになつたのは事実だったので、ただ謝るしかなかつた。

「もう君には頼らん。好きにしろ！」

要するに、クビ宣告だった。リトルはひどく落ち込み、力なく座り込んだ。

貴族は次にサモンに近より、礼を言つた。

「ありがとう。君のおかげで助かつたよ」

貴族はサモンに袋を渡した。中にはリトルに渡す予定だったお金が入つていた。

「これからも私を護衛してくれないかね？ そうすればこの倍の金を払おう」

サモンは貴族が、竜のカードをチラチラ見て居る事に気づいた。そして隣で座つて居るリトルを見る。

「わりいけど、やめとくよ」

彼はそう答えたが、貴族は離すまいと詰めよつてくれる。

「なら、三倍、いや五倍出そつ。どうだ！？」

「オレ、貴族嫌いなんだよな」

サモンは即答し、さらに一言付け加えた。

「人のもの売つて金儲けしようとするところがな」

貴族は自分の思っていたことがバレていると気付き、しぶしぶ手

を引いた。そして二人の護衛と一緒に、足早に町を出ていった。

サモンは落ち込んでいるリトルの横に座ると、少したつてから話を

をした。

「兄貴を、探してるんだ」

リトルは黙つて聞いていた。こんなに強い少年が、なぜ旅をしているのか聞きたいと思つたからだ。

「兄貴はかつこよくて、強くて優しかった。だけど十年前、旅に出ていつたんだ」

サモンは急に立ち上がり、胸前で拳を握る。

「兄貴に追い付きたい。だから旅して、強くなるんだ！って決めたんだ」

そしてサモンは、リトルの眼を見て言つた。

「ついて来てくれないか？ 護衛じゃなく、仲間として！」

「えーっ！？」

リトルは言われた意味を理解すると、大きな声で叫んだ。

「何で急に……しかもまだ会つたばかりの私を？」

当然と言えば当然の質問に、サモンは笑つて答えた。

「また、お前のおにぎり食いたいからな！」

リトルは、ニコニコしている彼を見て、自分も笑いが込み上げてきた。そして彼女は言った。

「いいよ。私も人探ししてるし、おにぎりくらい簡単だからね！」

彼女も立ち上がり、少し背の低い少年を見る。

「これから、よろしくね！」

「ああ、よろしく！」

サモンは満面の笑みを浮かべて言つた。

「ところで

リトルがサモンに聞く。

「歳いくつなの？」

「十八だけど？」

彼の答えに、もう一度サモンを見た。身長もリトルより小さく、体つきも少し子供っぽい……リトルにはどうしても、サモンが歳上には見えなかつた。

魔法と手紙と人の思い

森で出会い仲間になつた彼らは、町で食糧など必要な物を買つた。パンとリトルの銃弾を買つと、次の町へのルートを決めるため、地図を買う事にした。

「あんたら、旅人かい？」

小太りした雑貨屋の店主が、地図を手にする一人に聞く。

「はい、これからどこへ行こうか決める所なんです」

リトルが答えると、店主は少し考えてから言った。

「ちょっと手紙を届けてほしいんだが……」

少し間をあけて話を続ける。

「隣の町に娘がいて、元気でやつてるか気になつてしようがないんだ。だが最近、配達屋が来なくて困つてるんだ」

代わりに行つてきてくれないか？と店主は申し訳なさそうに言つた。

「手紙だな、いいぜ！」

サモンがすぐに返事を返す。店主は「ありがとう」と何度も言つて、地図を広げて指を指した。

「この洞窟を抜けたら、娘が住んでる町に行ける

さらに指を動かし、大きな字が書いてある場所を指した。

「近くには都市トールがある。魔法が盛んな場所だから、一度訪れて見るといい」

サモンは「楽しみだな！」と言ひてはしゃいでいた。まるで遠足に行く子供のようだ。

「娘さんの名前は？」

「クルミだ。町ではカフェをやつてゐるから、店を探すといい」

店主は紙に自分の名前をサインして、手紙と一緒にリトルへ渡した。彼女はしっかりとそれを受け取ると、折れないようにそつと力バンの中に入れた。そして行き先をメモした地図をもらつて、飴が

欲しいと駄々をこねるサモンを引きずつながら店を出た。

洞窟は森を少しだけ戻り、分かれ道を曲がった先にある。そのため彼らは今、森の中を歩いていた。

「ねえサモン」

リトルが途中で足を止める。サモンは振り返って、彼女の話を聞いた。

「あの紅い竜って、どうやって出してるの？」

魔獸を従えるのは、極一部の人間にしか出来ないことだ。代表的なのはビーストティマーだろう。だが彼らは常に魔獸と共に生活し、カードやボールにしまうなんて事はしない。またワープなんて魔法は夢の話で、出来たなら世界から拍手喝采なのだ。

「どうやって出してるか？」

サモンは「うーん」と少しだけ考えた後、笑って答えた。

「わかんねえ！」

「そんなことないでしょ！」

リトルはサモンの左ポケットから紅いカードを無理やり引っ張り出して、彼の真似をしてカードを降り下ろした。しかし何も出てこないどころか、カードから何の魔力も感じなくなつて、紅い色も褪あせてしまつた。

「だから、わかんないけど」

サモンは彼女からカードを返してもらつ。すると不思議な魔力がカードにやどり、色も元に戻る。

「オレが出したって思うと、使えるよつになるんだ」

彼はカードを左ポケットにしまうと、洞窟に向かつて歩き出した。リトルは不満そうに後をついていった。

「あれは……」

黒いフードをかぶつた赤い目の中年が、木陰から一人のようすを見ていた。彼はしばらくしてから、黒いカードを手にその場から姿を消した。

洞窟内は意外と広く、灯りも点々とついていた。一人は地図を片手に奥へ奥へと進んで行く。途中の分かれ道では、リトルが念入りに地図を確認していた。

「わっ」

「いたつ！」

突然、見知らぬ男が急いでいたのか、前もよく見ず走っていたせいで、地図をもつていたリトルに思い切りぶつかった。リトルはしりもちをついて、荷物が足元に散らばる。

「す、すいません！」

男はすぐに荷物を拾い、リトルに手渡した。

「ごめんなさい、急いでまして……」

「いえいえ」

彼女は笑っていたが、足を少しだけ痛めたようだ。男はそれに気づいたのか気づかなかつたのか、すいませんともう一度言つて逃げるようになつて走つていった。

「大丈夫か？」

「うん、平気だよ」

サモンが心配するが、リトルは痛みを隠して笑顔を返した。するとサモンはリトルから荷物を取り上げ、自分のと一緒につなぎ合つた。

「無理すんなよっ」

得意の満面の笑みに、リトルは「ありがと」と笑顔を返す。そして二人は、出口へと歩き出した。

「作戦成功つ、と」

岩影でさつきの男が一やりと笑う。そして、サモン達とは別の方へ走り去った。

一人は地図を頼りに、洞窟内を進んで行く。だいぶ歩いたところで、ドームのように広くなつていた場所にたどり着いた。

「少し休もつか」

リトルが言うと、サモンは一人ぶんの荷物をドサッと下ろし、「ロンとその場に寝転がつた。

「まだ出口じゃないのかあ？」

「あと少しよ」

リトルはパンと水筒を取り出すと、転がつているサモンの前に置く。すると彼はすぐ飛び起きて食事を始めた。

リトルは指先に小さな火を灯し、パンをきつね色にやいて食べた。それをサモンが珍しげに眺める。

「どうしたの？」

リトルがそれに気づいて訪ねる。

「オレ、魔法つて使えないんだ」

魔法は大抵、親が子に教えていくものだ。血筋や性格で使える魔法の質が変わつてくるので、一番性格が近い父か母に教わる。リトルも小さい頃、母親に教わつたのだ。

「しようがないわね、じゃあ私が教えてあげる！」

彼女は魔法を知らないサモンの事を不思議に思いながらも、両手を広げてサモンに説明した。

「手のひらに意識を集中させて、力を流すの」

するとリトルの手から、小さな炎が燃え上がり、辺りを明るく照らした。サモンはそれを見て「おおっ」と驚き、同じようにやってみる。

「手のひらに、力を……」

サモンは目をつぶり、意識を集中させて、力を一点に注ぎ込む。ブツーと、サモンのお尻から特別臭いおならが、炎のかわりに出

た。

「ちょっとサモン！」

リトルは鼻をつまみながら怒り、サモンと距離をおく。彼はは笑いながら顔を赤くして「『めん』と謝るが、面白半分にリトルを追いかけた。リトルは逃げようと走りまわり、サモンはそれを追いかける。

少しの間おいかけっこが続いていたが、一人とも疲れてその場に座つた。リトルは荷物をまとめ、いつでも出発出来るように準備する。

「いまだっ、かれ！」

すると突然岩の影から数人の男が現れ、剣やダガーでリトルに襲いかかってきた。サモンはとっさに彼女の前に行き、腰の剣を振り抜き攻撃をはじく。そして荷物とリトルの手を握り、洞窟の奥へ走り抜けた。

「逃げられると思うなよ！」

男達はニヤニヤと笑いながら、一人の後を追いかけてくる。

「何、あいつら！？」

「盗賊かなんかだろ！」

サモンはリトルに道案内をしてもらいながら、洞窟の中を全力疾走した。右へ左へ、曲がりくねった道を進む。

「そこを曲がつたら出口よ！」

リトルが手を引かれながら言った。後ろから盗賊達の声が聞こえてくるが、洞窟を出てしまえばすぐ町に逃げられる。

「なつ……！」

しかし、曲がり角をノンストップで進むと、そこには外の明かりではなく、分厚い土の壁が立ち塞がっていた。二人が戻ろうと振り向いた時には、追いかけていた盗賊が道をふさいでいた。

「道がないっ！？」

「どうなつてるの？」

「どうなつてるの？」

リトルは地図を何度も確認したが、やはりここが出口だった。サモンは盗賊を睨み付けて威嚇していると、一人の男と目が合った。

「あんたは！」

盗賊の中に、途中でぶつかってきた男がいたのだ。そいつはゲラ

ゲラとあざけり笑い、二人をばかにして言つた。

「ちよいと地図をすり替えたのさあ」

バカ正直に信じやがつた、と男が言つと、盗賊達は一斉に笑う。リトルは頭にきて、腰から銃を抜いた。

「このつ……！」

「おつと、大人しくしてろよ」

しかし一人の盗賊がそれに気づき、魔法を唱えた。すると地面から鉄の鎖が生えてきて、生き物のようにリトルの銃を叩き落とした。さらに鎖は一人の腕と体をぐるぐると縛つて、身動きが取れなくなつてしまつた。

「ここのは土は鉄分が多くてな、鉄の魔法使いとしては居心地がいいんだ」

「さすが、^{かじら}頭の鉄魔法は最強つすね！」

別の盗賊が魔法使いをおだてた。どうやら鉄魔法の男がリーダーらしい。

さらに盗賊の頭はリトルの鎖を伸ばし、鎖の端を持つと近くにたぐり寄せる。

「何するのよ！」

リトルが離れようともがいたが、鎖はびくともしない。盗賊は二タニタしながら彼女の首もとにダガーの刃を当てる。

「リトル！」

「おつと、動くなよ」

鎖が器用に動き、サモンを殴りつける。そして一人の荷物を盗賊達の足元に投げ飛ばした。

「やつほおい！」

盗賊の手下達は荷物に飛び付き中をあさつた。だが出てくる物は

食品ばかり、金田の物など入っているはずがなかった。

「頭、これが最後です」

したつぱの盗賊が、雑貨屋の店主から預かった手紙を出した。だが頭は中を開けるまでもなく、ビリビリと手紙を破り捨てる。

「ち、今回はハズレか」

そう言つて、ちぎれた手紙の欠片を踏みにじつた。

「前に捕まえた配達屋も手紙しかもつてなかつたが、くだらねえー…あの町に配達屋が来なかつたのは、盗賊達が襲つていたからだつた。頭は土で汚れた手紙を見下し、唾を吐き捨てた。

「おい」

サモンがボソリと呟つ。頭が彼を睨み付けると、逆に睨み返した。

「おっしゃんの思ひに、何やつてんだ」

「何言つてやがる」

頭がサモンに近づくと、赤くなつていていた。そしてついにはドロリと溶け落ち、地面の上で冷え固まつた。

「て、鉄を溶かしやがつた」

盗賊達は驚き、しりごみした。サモンは身体から湯気を出しながら、両手を前に出し、手のひらを盗賊に向けて目を閉じる。

「手のひらに、意識を、集中させて……」

リトルはとつさに頭の腕に噛みついた。田の前の少年に氣を取られていた頭は怯み、リトルを離してしまつ。彼女は散らばつて荷物を岩の陰へ蹴り飛ばし、自分もそこへ逃げた。

頭は小娘より先にガキを始末しないと思ひ、おどおどする手下達に舌打ちしながら両手をサモンに向けた。

「もう一度縛られてろー！」

頭が魔法を使い、無数の鎖を地面から出した。それはサモンの足や両手を縛り、動きを封じようと巻き付く。だが、少年に触れたとたんに、熱で溶けて地面に落ちていつた。

「な、なんだこいつっ！」

手下の盗賊達は次々と逃げ出し、視界から消えていった。頭はしつこく鉄魔法を使っていたが、彼を止めるることは出来ない。

「集中、集中、集中……！」

サモンは今まで閉じていた目を開く。すると両手からは大きな火炎弾が、盗賊に向かつて発射された。

「ぐわああああっ！」

一瞬で頭は黒焦げになり、火炎弾は壁を突き抜けていく。その先にいた逃げ惑う盗賊達は巻き込まれ、炎に包まれる。

サモンは火炎弾を撃つた反動でその場に倒れ、リトルを縛つていた鎖は術者が氣絶したせいで、魔法が解けぼろぼろと崩れ落ちた。

「サモン！」

彼女は倒れたサモンにかけよると、ゆっくりと体を起こした。

「腹、減った」

「……町についたらね」

サモンは立ち上がると、リトルと一緒にまっすぐな洞窟を歩いた。道の先には、橙色の夕陽が差し込んでいた。

「次の町まだかー」

サモンがだらけて言う。その言葉に隣の少女はハッと気づいて言った。

「そうだ、手紙は！？」

店主に頼まれた手紙は、サモンの魔法で灰になっていた……。

騎士と正義と青年と

一人が洞窟の出口にたどり着いた時、逆に洞窟に入ろうとしている一団と会った。全員で十数人いる彼らは、同じ銀の甲冑を身に付け、黄色の紋章が描かれた盾を装備している。兜のせいで表情は見えないが、ピリピリした空気を漂わせていた。

「その者、止まれ！」

先頭の、他の兵士より位の高そうな装備をした騎士が、太い声で叫び剣を抜いた。サモンは腰の剣を抜こうとしたが、リトルが「待つて」と彼を止める。

「貴様ら、盗賊の仲間か？」

答えるべしと騎士は怒鳴った。後ろの部下である兵士達も剣に手を当て、いつでも戦闘が出来るようにしている。

「私達は盗賊じゃありません。盗賊なら奥で寝てます！」

リトルが断言した。だが騎士はその言葉を信用していないらしく、手合い図で部下二人を洞窟へ送りこんだ。

「隊長！」

しばらくして、部下が急いで帰ってきた。騎士は報告を聞いて驚いた。

「盗賊が、壊滅しただと？」

数秒間黙っていた騎士は、ぐるりと振り向き、部下全員に早口で告げる。

「第一部隊と第二部隊は現地で残党の逮捕及び連行、第三部隊は伝令として国王に報告、かかれ！」

騎士の号令で他の兵士達は一斉に動き出した。そして、その場にはサモンとリトル、騎士の三人が残った。騎士は剣をしまい、兜を外す。

「申し訳ない」

黒髪に口髭をはやした男前の騎士は、頭を深々と下げて謝った。

「私はトール国^{めい}の騎士・ジンと申す。盜賊逮捕の命^{めい}を受け、この地へやつて來たのだが……」

そこまで言つたところで、リトルが話を遮つた。

「顔を上げて下さい。私達、何もされてないですから。それに戦地なら人を疑うのは基本的なことですし」

彼女の言葉に心を救われたジンは、もう一度頭を下げて言つた。

「お詫びに町まで送らせて送らせてもらいたい」

ジンは近くまで自分たちが乗つて來た馬車に案内し、二人を町まで連れていった。戦闘用なだけあって屋根もなく椅子も固かつたが、馬の速さは貴族用のそれとは別格だった。サモンがふざけて落ちそうになりつつも、徒步の数倍早く町へついた。

すっかり日も暮れ、すでに月が顔を出していた。ジンは馬を入り口に止めて二人を下ろす。

「国王に報告が終わつたらまた来よう。その時は食事かなにかさせてくれ」

「送つてくれてありがとう、おっちゃん！」

サモンがあれを言う。ジンは少し笑つて「それでは」と挨拶する^ト、馬車を走らせ闇に消えていった。残された二人は、空腹を満たそうと近くの飲食店に入った。

「いらっしゃいませーっ」

店には数人の客とバーテン、そしてエプロン姿で接客をする女の子がいる。見た目はサモンと変わらないほど幼く、15歳位だろう……。二人はカウンターに座ると、とりあえずご飯とおかずを注文した。料理が並ぶと、サモンは勢いよく食べ始める。リトルは少ししてから、接客していた女の子を呼んだ。

「この町に、クルミつて子がいると思うんですけど

リトルが訪ねると、女の子は「コッ」と笑つた。

「私がクルミです、お客さん」

店を少し抜けて、リトルとクルミは裏口の近くで話をした。雑貨屋の店主から手紙を渡された事、洞窟で盗賊に襲われた事、サモンが手紙を燃やしてしまった事を、順番に話した。

「ごめんなさい、手紙を届けられなくて」

「いいですよ、いつも同じ内容なんですから」

クルミは終始クスクスと笑いながら、リトルの話を聞いていた。一枚片も怒る様子は見られない。リトルは内心ホッと氣をゆるめ、気になっていた事を聞いた。

「お父さんとはどうして離れて暮らしているの？」

すると、クルミは突然顔を赤らめてうつ向く。リトルはニヤリと笑うと、肘でツンツンと彼女をつついた。

「好きな人、追いかけてきちゃったとかー？」

クルミは小さくなづく。リトルはさらに「名前は?」「どんな人?」と質問攻めにしたのだが、彼女が答える直前に、店からバーテンが慌てて出てきた。

「お客様、連れの方が大変だ！」

「サモンが?」

……リトル達が裏口へ出た後、サモンは一人勢いよく食事をしていた。

「よく食べるねえ」

バーテンが感心するが、全く反応せず食べ続ける。すると隣に、襟つきの服を着た細身の青年が座つた。白い服の上に黒い服を羽織りズボンも髪も黒一色なので、全般的に暗い印象を受けた。サモンは青年が首から下げる袋が気になつたが、無視して食事を続ける。

「マスター、いつもの」

青年の注文に、はいよとバーテンは支度をした。飲み物が置かれるまで彼はサモンを卑しいといった目で見ていたが、サモンはそれ

でも気にせず食べ続けていた。

しかし、サモンが水を飲んだ時勢いがよすぎたのか、隣の青年に少しかかつてしまつた。すると青年はカウンターを叩きながら立ち上がり、サモンを睨み付ける。サモンは驚いて手を止めたが、自分が何をしたのか分かつてはいない。

「君、まわりに気を使つて食事しないか。ソレは自己じゃないんだぞ！」

サモンは逆に怒り、青年に叫んだ。

「ばはまらう、ふいかはたんでびゅうまる！」

しかし、口の中に食べ物が入つていたせいで言葉にならず、やらない食べ物が青年に襲いかかる。

「……っ！」

青年は我慢ならないといった感じで、声を荒げて言った。

「外へ出ろ、決闘だ！」

サモンも「おう！」とうなずいた。ちょうどリトル達が入つて来たが、男達は無視して外に出ていった。

「どちらかが降参するまでやるからな」

「ああ、わかった」

一人は月夜の下、数メートル離れて立つ。周囲にはやじうまがぞろぞろやって来て、自然と戦いのリングができていた。リトルは飛び出してケンカを止めたかったが、すぐに試合が始まってしまった。

「いぐぞ！」

サモンは腰の剣を抜き、勢いをつけて飛びかかる。青年は避ける様子も無く寸前まで剣を惹き付けると、両手のひらで剣の刃を挟み込んだ。

「甘いんだよつ！」

俗にいう白刃取りだ。両者は見合つたまま動かず、いや動けずに、じりじりと力比べをしていた。意外にも青年の力が強くて、サモンは留めておくので精一杯だ。

「どうした、腰のカードは使わないのか！？」

サモンは咄嗟に左ポケットを見た。トランスの前ではカードは出していないし、話してもしていない。そのすきを逃さなかつた青年は、剣から手を離すと同時にサモンの顔面にひじうちを食わせる。彼は一瞬ひるみ、後ろに数歩よろめいた。

「なんで、カードの事わかつたんだ！？」

しかしサモンは顔の痛みなど無かつたかのように立ち、青年に向かって言った。

「そんなこと、簡単だろ……っ」

青年はそう言つと、自分の胸を服の上から押さえ、倒れるように座り込んだ。サモンも青年の様子がどこかおかしい事に気がつき、構えを解く。

「トランス君！」

クルミが青年、トランスの元に駆け寄る。彼はすでに息が上がり、ヒューヒューと変な呼吸音が聞こえてくる。

「邪魔、するな……」

トランスは差しのべた手を払いのけようとしたが、体が動かない。クルミは向きを変え、驚いているサモンに言った。

「トランス君は病気なの、お願ひだからこれ以上戦いを続けないで」
サモンはしばらくして、剣を鞘に収めた。トランスは睨み付けていたが、彼はいつもごとく笑つて言った。

「メシ食つて元気になつたら、決着つけようぜ」

そしてサモンは、店に戻つていった。

仲間と銀と黒の札

次の日、朝からサモン達はクルミの店で手伝いをしていた。昨日のケンカで店の邪魔をしたお詫びと、宿を探そうとした二人を泊めてくれたお礼だ。リトルはクルミと一緒に、カフェの制服を着て接客をしている。

「マスター、可愛い子が入つたじゃないか」

「今日だけのバイトさんだけど、仕事も出来るし惜しい人材だなあ」
リトルはベテランのクルミに劣らない働きっぷりを見せていた。
実際には一人必要なほど忙しくはないのだが、女の子が一人増えるだけで、店の雰囲気がずっと良くなっていた。

「じゃあコーヒーと卵サンドで」

「かしこまりました！」

「お嬢ちゃんこつちも」

「はいっ！」

リトルが店で活躍している頃、サモンは店の裏で薪割りをしていた。重たい斧を振り上げ、切り株の上に置いた丸太に降り下ろす。単調で疲れる仕事に、彼は嫌気が差していた。しかし他にできる事は皿洗いくらいだが、それをしても割れた皿がふえるだけでなんの意味もない。

「よう」

退屈で死にそうなところに、黒い襟つきの服を着た青年……トランプがやって来た。サモンは斧を振る手を止めて、額の汗をタオルで拭きながら彼を見た。首からは昨日と同じく袋を下げている。サモンはそれも気になっていたが、ケンカの決着もつけたいと思つていた。

「昨日の続きか？」

サモンは斧を投げ出し、外していた剣を拾い上げた。決闘のほう

が薪割りよりずっと楽しいと思ったからだ。しかしトランスは構える様子もなく、近くの薪に腰掛ける。

「話がしたい」

がつかりするサモンをよそに、トランスはおもむろに首にかけた袋から中身を取りだし、サモンに見せた。中身は長方形の札で、銀色に輝いた縁の中に銀の鎧兜を身につけた騎士が描かれている。サモンは驚いた。それは紅い竜と同じ、召喚師のカードだった。

「サモンって言つたな、お前もカードを持つてるんだろ?」

トランスの言葉にサモンは左ポケットを見た。そう言えば昨日も何故、カードの事がわかつたのだろうか。

「なんでわかつたんだ?」

サモンは不思議に思い、トランスに聞いた。すると彼は呆れてため息をついたあと、カードをくるくると回して答える。

「異常な魔力がカードから溢れているのに気づかないのか。この袋みたいに防魔の術式をかけておかないと、誰だつて気づくだろ」

トランスの首に下げられている袋は、パツと見た感じではなんの変哲もないただの袋だ。しかし裏側には無数の術式と魔法印が刻み込まれている。

トランスは一通り説明を終わるとサモンの目を見て、不安と期待を込めて言った。

「お前、召喚術を使うのか?」

「もちろん!」

それはサモンにとって当たり前の事だったので、胸を張つて答えた。そして紅いカードをポケットから取りだし、炎の竜を解き放つ。「ディノ!」

出てきた竜は翼を小さく折り畳み、体を丸めて休んでいた。召喚された後も周りに殺気が感じられないからか、起きようとはしない。トランスは恐る恐る紅い竜に近づき、体を撫でた。竜は静かに寝息をたてて嫌がる様子もなかつたが、彼は少し触れたあと距離を取つた。

「トランスも召喚しようぜ」

サモンは寝ている竜の上に飛び乗り、そこに自分も寝そべって言った。しかしトランスはカードを袋こしまつと、悔しそうな顔をしてサモンに言つ。

「僕は、召喚術は使えない」

サモンは体を起こしてトランスを見た。彼はしばらく黙つたままうつ向いて、首から下げた袋を握りしめる。

「召喚師の血は、僕にはほんの少しあが流れていないんだ。一応召喚師の孫なんだけどな」

トランスのおじいさんは純粹な召喚師の魔力を持っていた。しかし結婚し子供の代になるに従つて、その魔力は薄れ、消えていったのだ。

「カードから召喚するなんておどき話かと思つていたよ」

「お前……」

トランスは確信した。召喚師はいるのだと、自分は召喚できないのだと。今まで彼が抱いていた希望と不安はすつきりなくなり、虚しさだけが残つていた。

「オレもすぐに呼べた訳じゃないんだ」

サモンの声に反応してトランスが顔をあげると、彼は竜の上から空を見ていた。

「ある日突然、空を見てたら聞こえたんだ。『飛ばないか』って」
いつもの笑顔で、彼は言つ。

「いつか聞こえるや、お前にも…」

するとトランスも、空を見上げてみた。声は聞こえなかつたが、心はすこし軽くなつた。

「ゼエはあ、ちっくしょー!」

男は両手を縛られたまま、草むらを走り続ける。

「なぜ逃がした！」

「申し訳ありません」

「追え、すぐ捕まえろっ！」

後ろから数人の男の声が聞こえてくる。その度にもつれる足に鞭打ちながら、近くの町へ急いだ。

「許さねえぞ、あのガキつ！」

髪の毛がチリチリの男は、歯を食いしばって走り続ける……。

「そろそろお昼にしませんか」

お昼のお客もピークを過ぎ、店内は少し静かになっていた。クルミが手を止めて、テーブルを拭いているリトルに言つ。彼女は「はい」と返事を返して、使っていた布巾を洗い場に持つていった時、ふとあることを思いついた。そして、コップを拭いていたバーテンに聞いた。

「ちょっと調理場借りてもいいですか？」

バーテンが「どうぞ」と快く承諾してくれたので、リトルは早速袖をまくつて料理を始める。といつても作るのは、包丁も鍋もフライパンも使わない、ただのおにぎりだが。

クルミはその横で昼御飯を作りながら、リトルの手つきに見っていた。白米が彼女の手によつてみるとうちに形取られていく。

「上手ですね」

「私よく作つてたから」

これしか知らないんだ、リトルは笑つて言つた。だがその表情には少し寂しさも混じつていたが。

「お、いいにおいだな！」

「マスター、僕もお昼いいかな」

すると、裏にいた一人も店の中へと入つて来る。昨日と違つて仲が良さそうだったので、リトルとクルミは少し安心した。

「はい、どうぞ！」

クルミはできた料理をカウンターに並べると、サモンは早速食べ始めた。トランスは昨日と変わらないサモンを見てぶつぶつ呟いた後、自分も一つ席を開けて座る。

「旨いなこれっ！」

「食べてる時は喋るなよ」

トランスはサモンを注意するが、昨日のよつに敵意をむき出したではない。サモンもそれがわかつているのか、度が過ぎない程度にはしゃいでいた。

「はい、おにぎり！」

リトルはカウンターに、自作のおにぎりを山盛りにした皿を置いた。サモンは早速手にとつて口へ入れる。

「……うまいっ！」

中の具はなく塩味だけのおにぎりを、サモンは何個も食べていった。トランスもつられて一つ食べてみたが、普通のおにぎりだと言いつつ一つ目を手に取る。

「私達も食べよっか！」

食事を先に始めた一人の幸せそうな顔をみて、リトルとクルミも隣に座つて料理を食べる。その間、四人に笑いが耐える事はなかつた。

「つだらつしゃあーー！」

突然後ろから、がらがら声で叫びながら男が乱入してきた。後ろ手に手錠をかけられ、髪の毛はチリチリ、さらに肌はあちこち火傷の跡がある。

男は店内を睨み付け、カウンターに座つている四人とその奥にいたバーテンを確認した。彼らは後ろを振り向いて敵と認識していたが、食事中だったので武器は手元になく無防備な状態だった。

「ガキ……あん時は世話になつたなあ！」

「まさか、盗賊の頭？」

田の前にいた男は、洞窟でサモン達が襲われ、逆に返り討ちにした盗賊の頭だつた。盗賊はあの時のように鉄の魔法を使い、床を突き破つて出てきた鎖を操つた。五人は身体と手を鎖に縛られ、足は床や壁からのがた鎖に繋ぐ。その場にいたサモン達は、完全に身動きが取れない。

「てめえら、なぶり殺しにしてやるう！」

盗賊は体を反らしながら、復讐に歡喜して叫んだ。リトル田の前に立つおぞましい氣を感じ田をそむけて、あの時の魔法を思い出す。

「サモン、あの火炎魔法使える！？」

おう、と彼は返事を返したが、いくら集中してもからだから炎が出来るどころか、熱くもならない。

「全く、魔法はもつと効率的に使用するものだぞ」

トランスはウンウン唸つているサモンを横田に、魔力を身体中に集める。すると体を縛っていた鎖があの時のサモンのように、どろどろと溶け落ちた。しかし盗賊も一度田の体験だつたので驚く事はない、高笑いをしてトランスを睨んだ。

「ガキ共がふざけやがって、黙つて捕まつてりや 良かつたのにな！」

全く盗賊の言つ通りだ、とトランスは思った。体は昨日の決闘から全快しておらず、じきに再発して動けなくなるだろひ。その上で戦うのはあまりに無謀だつた。

だがトランスは許せなかつたのだ。盗賊や殺人、横暴を働く貴族など、世界に充満する「悪」を。自分の中の「正義」を掛けて戦いたいと常々思つていた。

「じいさん、力を貸してくれ」

彼は袋の中のカードをイメージしながら、天国のじいさんに語り掛けた。もちろん返事は返つてくるはず無く……

「感じろ、トランス！」

ふと頭の中で声が聞こえた。その声ははつきりと覚えているじいさんの声ではなく、若い男の声だつた。

「仲間に力を託すのだ、トランス！」

「ま、まさかお前は……」

その答えは返つて来なかつた。だが、トランスはやることがすでにわかつていた。

両手がふさがつてゐる盗賊は、トランスに鉄の砲弾を作つて投げ飛ばした。しかし彼は左手で受けとめ溶かし、右手はサモンを縛る鎖に当てた。しかし、全てを溶かす事はできず、サモンは何とか左手が動く程度にしかならない。

「さつさと済ませろ、よ……」

トランスは胸を押さえ、その場にうずくまる。サモンは左手で握りこぶしを作つて彼につき出すようにした。

「ありがとな、トランス！」

サモンの笑みにトランスも苦しみをこらえて笑つた。盗賊はトランスがなぜ倒れたのか理解はしていなかつたが、へらへらとして嘲り笑つた。

「たかが左手のために倒れやがつたぜ……ヒハハハ

「たかが左手か？」

サモンはトランスの活躍で動くよくなつた左手を、ポケットに突つ込んでカードを取り出した。

「片腕だけで何ができるつて……！？」

紅い竜が目の前の鉄の魔法使いを睨み付け、吐息は火が漏れだして熱い。鱗は逆立つて刺々しく、昼寝をしていた竜とはまるで別な生き物のような形相で、敵の前に立ちふさがる。

「ディノ、いけっ！」

「まさか、こいつは……」

竜の口から漏れだした炎が溢れ、口一杯に広がつたそれは、持ち主の掛け声と共に解き放たれる。その火炎は一度味わつた痛みを蘇らせ……

「ぐわああああつ！」

再び盗賊の頭は火炎に包まれ、ドアを突き破つて外へ吹き飛んだ。

盗賊は捕まりたくないと終始叫びながら、ルーンの兵士に連れて
いられた。店は入り口のドアが壊れ、床に穴が空いた程度だった。
だが兵士が魔法で修復してくれたので、店を続ける事ができる。そ
もそも盗賊が逃げたのは、兵士の不注意が原因だったらしいが。

「トランス君、大丈夫？」

事件中ほぼ無傷で見ていたバーテンが兵士との手続きを全てして
くれたお陰で、リトルとクルミはトランスの看病に集中できた。サ
モンはいても邪魔になるだけだったので、外で待っている。

「……っ」

「気がついた！」

ベッドに寝かされていたトランスは、ゆっくりと体を起こす。

「もう、無茶ばっかりして！」

クルミは泣きそうな顔をして言つと、トランスに抱きついた。慌
てるトランスをリトルが茶化すので、彼は顔を赤くして
いた。

「起きたみたいだな！」

サモンがいつも満面の笑みで部屋に入つてくる。トランスはつ
られて少し笑うと、ありがとうと小声で言つた。

「いらっしゃい」

四人が部屋にいた時、店に一人の男が入ってきた。その男は黒い
ローブを身に付け、口元しか見えないくらいフードを深く被つてい
た。バーテンは変なお姫さんだなと思いつつも、カウンター席に座
った男に水を出す。

「コーヒーを一杯」

男はかなり低い声で言つた。まるで変声機でも使つてゐるかのよ

うだ。

「少しお待ちを」

バー・テンは豆を機械の中に入れ、しばらくしてできたコーヒーを出す。男はカップを手に取りゆっくりと口に含む。

「……マスター、美味しかつた。ありがと」

男はお金をカウンターの上に置くと、コーヒーを持ったまま立ち上がる。すると徐々に姿が薄くなつていき、わずか数秒で姿を消した。バー・テンは狐につままれたような出来事に、しばらくの間なにも考えられなかつた。

「どこへ行つてたんだい？」

黒いローブを着た男は、草原のまん中にいた。田の前には同じくローブを着た、男より少し身長の低い青年がいる。

「コーヒーを飲みに」

男は手に持つたカップに、もう一度口をつけた。青年は黙つて黒いカードを取り出すと男に向けた。すると男はカードの中に入つてしまい、手に持っていたカップはその場に落ちてガシャンと割れた。「次にいくよ、デーモン」

青年が呟くと、頭の中であつさの男の声が響く。

「わかりました、『ツール様』

彼はカードをしまい、草原を歩き出した。都市ツールへ向かつて

……。

続く

あれから一週間ほど経ち、サモン達は別れを惜しみながらも都市トールへ向かう事にした。店の裏から出ていく一人を、クルミが見送つてくれる。

「リトルさん、またお店に来てくださいね！」

「もちろん！ その時はもういろいろな料理、教えてね」

ほんの数日で意氣投合した彼女達は、両手で握手を交わした。昨日も夜遅くまでいろいろ話をしていたみたいだ。おにぎりと卵焼きしか作れなかつた彼女も、クルミの指導でレパートリーが増えたらしい。

しかしサモンはこの一週間薪割りや荷物運びをさせられて、遊び相手もいなかつたので退屈で仕方なかつた。その上トランスは病状がなかなか回復しなかつたので喧嘩の決着もつけられず仕舞いだ。

「サモンさんも、また来てくださいね」

「勿論！」

サモンはそう言つと、一階の、トランスが寝ている部屋の窓を見た。窓は閉められていて、カーテンもかかっている。

「絶対、決着つけに来るからな！」

サモンは窓の向こうにいるトランスに叫ぶと、クルミに別れを告げて都市トールへと歩き出した。

「……またな、サモン」

トランスはカーテンの隙間から、小さくなつていぐ一人を見た。胸の袋に手を当てて、再会を誓いながら……。

両脇に林が広がる道を、二人はトールへと歩いていた。ここはよく商人が利用する道で、靴や車輪で踏み固められていてとても歩きやすかつた。

リトルは辺りの景色を見ながら、サモンの事をぼんやりと考えていた。一人で旅をしていたり、魔法を知らなかつたり、不思議な竜のカードを持つていたり……。

「そうだサモン、竜に乗つかつてトールまで行けないの？」

なんで今まで気づかなかつたのだろうとリトルは思いつつ、サモンに聞いてみた。彼は頭を搔きながらカードを取り出したが、あまりいい顔をしてはいない。

「んじや、飛んでみるか」

振り下ろされたカードから、紅い竜が姿を見せる。それはなんだか眠たそうにあぐびをしていたが、翼をゆっくりと動かすと離陸の体勢に入った。

「よし、行くぜっ」

「やつたあ！」

一人が背中に飛び乗ると、竜は大きく羽ばたいて地面から離れていき、見る見るうちに大空を進んでいった。

「ヤッホー、快適快適っ」

リトルが下を見ると、既にさつきの位置から大分進んでいる事に驚いた。しかし見える都市の姿はまだ小さく、しばらく飛んでいいとたどり着かない距離だつた。

「リトル、ごめん……」

「え、何？」

景色に気をとられていたリトルは、サモンの言葉の意味がわからなかつた。しかしすぐに異変は訪れた。

「グオオオ……」

紅い竜が低く唸ると、体がホタルのような無数の光になつて四散

したのだ。当然乗っていた二人は支えを失い重力に引き寄せられる。「待つてえええ！！！」

さっきまで見ていた景色が、瞬きする度に近づいてくる。それも急速に。

「サモン、何でこうなったの！？」

「腹減つたあ……」

「答えになつてないよおおおおーーーー！」

リトルは叫びながら林の中へ落ちていった。

「痛つ……」

無数の鳥達が鳴き声を上げて飛び回っていた。二人は木の枝に引つ掛かって、なんとか大怪我をせずにすんだようだ。

「サモン、大丈夫？」

「なんとかな」

上空から奇跡的に降りたリトル達だが、いまどこにいるのか、さつぱりわからなくなってしまった。

「サモン、なんで竜を消したの？」

リトルは荷物から救急箱を取り出して、サモンのかすり傷を治しながら聞いた。

「オレもわかんない……。けど、急に腹が減ってきて」

するとほんの少し前に朝ごはんを しかもお茶碗三杯も 食べたはずのサモンのお腹が、大きく音を立てた。

「ええっ？ 仕方ないなあ」

リトルはカバンからおにぎりを出してサモンに渡した。彼はすぐ腹ごしらえに入る。

木が間伐されていて日差しが適度に入ってきたので、道に迷つてしまつた不安はあまり感じなかつた。まだ太陽は昇りきつていなし、元通り歩いて向かうのがいいだろつ。

リトルは地図とコンパスを手にぐるりと周りを見た。すると、近くに小屋があるではないか。しかも煙突から白い煙が出ている。

「サモン、あの家で道を聞こう!」

二人は小屋に近づいていった。しかしそく見るとその小屋には窓がなく、レンガの壁は所々黒く焦げ付き、入り口だろう扉は分厚い鉄で作られているという、なんとも不思議な小屋だった。

「す、すみません、どなたかいませんかー?」

リトルが鉄の扉を叩くが、返事はない。

「誰もいないんじゃないのか?」

「そんなはずないわよ。だつて煙突から煙が……」

一人が煙突を見上げると、紫色をした煙がもくもくと吹き出していた。煙が出ているという事は、人がいるという証拠だ。

「君たち、逃げて!」

不意に後ろから声がする。同時に小屋の屋根が爆音と共に、マングガのように高く吹き飛んだ。

あまりの光景に、一人は無言で立ち尽くすしかなかつた。

「驚かせてしまつてしまないな」

白衣を着た長髪の女性は一人に少し頭を下げた。そして長身で細身の彼女は、一人を屋根のない小屋に案内した。案の定あたりには分厚い本や魔法道具などが、爆風で散乱していて足の踏み場もない状態だった。

「私の名前はマーノ、物理魔法学調査研究会の会長をしていく

「……なんだかわかんないけど、偉いさんか!」

サモンは難しい単語に考えるのを止めたみたいだ。

「私はリトル、こっちはサモンです」

マーノはリトルと握手をすると、散らかった部屋の片付けに入つ

た。といつても指先を少し動かしているだけで、物が宙について、指定の位置に戻っていく。

「すうい……」

リトルは彼女の魔法に見とれていた。それもそのはず、彼女が使っている魔法は子供にもできる魔法だが、同時に数十もの物質を正確に移動させるのは至難の技だからだ。ちなみにリトルも使えるが、同時に動かせるのは一三個が限度だ。

「お待たせ」

マーノはキレイになつた部屋を見てうなずいた後、改めて一人を中心案内した。

部屋の壁には本棚やガラス棚が並んでいて、その中にところ狭しと資料や道具が置いてあつた。ここが小屋ではなく倉庫だと思えば窓がない理由も納得がつく。

真ん中にあるテーブルに、リトルとマーノが対面して座つていた。サモンは珍しい道具や素材を見て回つている。リトルはトールへ行く途中、竜から落ちた事をマーノに説明した。

「そうか、それで迷子というわけか」

マーノはがを出して笑つていたので、リトルは恥ずかしくて顔を赤く染めた。

「笑い事じゃないです！ 死んじゃうかと思ったんですから」「いやあすまない」

そう言つた彼女だつたが笑いは止まらないみたいだ。よほどツボにはまつたらしい。

「……で、トールへはどつちへ行つたらいいですか！？」

マーノがあんまり笑うものだから、リトルは少し怒り口調で聞いた。

「ああ、ここから南へ少し行けば、元の道に戻れるが……」

ぐいと体を前に出して、マーノが目を輝かせて言った。

「紅い竜とやらは本当にカードから出るのか!? だとしたらすごい事ではないか! 今まで人類はワープや転送と言った行動に縛られていたが、ついにその呪縛からも解放されるのか!—」

因みにマーノが言つた通り、この世界には魔法はあれど転送やワープと言つた物理的法則を越える物はない。火を起こすのは酸素と魔力を燃やし、水を作るのは空気中の水素と酸素を結び付けるのだ。

「サモン君お願いだ、一度見せてくれ!」

一人熱が入つてゐるマーノは、サモンの手を取つて懇願した。しかしサモンは相変わらずの表情だ。

「今日は疲れたから、いやだ」

「そう言わずに!」

マーノは次第に強く言つていたが、サモンも折れる気配はない。何度も断られた末に彼女が「カードだけでも調べたい」と言い出したので、仕方なく紅いカードを渡した。

それから数分後、あつという間にマーノは研究を終え、サモンにカードを返した。

「どうでしたか?」

「うむ、データは粗方もらつたよ。それにしても不思議なカードだな。……生きてるみたいに魔力が鼓動しているんだ」

「生きてるんですか!?」

驚くリトルに彼女は首を振つて、テーブルの上有る資料を手に取る。そこにはぎつしりと文字が走り書きされていた。

「無機物が生命をもつ……そんな事あるはず無いよ」

資料をテーブルに戻すと、マーノは都市への道を詳しく書いた地図を差し出した。

「リトル、早く行こうぜー!」

サモンがせかしてきたので、リトルはそれを受け取ると急いで小屋を出た。

「それじゃマーノさん、さよなら！」

改めて二人は、都市トールへと向かつて歩き出した。

外に出て見送りをしたマーノは、一人が見えなくなるまで眺めていた。
「不思議な魔法だな、あれもエンシェント・スキルなのか……」
彼女は一人呟いて、屋根のない小屋に戻つていった。

続く

都市と不良と兄弟探し

サモン達の目の前に広がるのは、舗装された大きな道。その両脇にはレンガ造りの店の列が並び、人々が賑やかに行き交う。そしてずっと奥……ちょうど街の真ん中に位置する場所にはひとりわ立派な塔が、天を突くようにそびえ立っている。

「すごい……」

「ここが都市トールか！」

辺りの賑やかさにサモンは感動していた。どこを向いても魔法が使われ、楽しく暮らす人々で溢れている。その光景にリトルも当然感動していた。

「よう、旅の人だね。この街は初めてだらう？」

そう話かけてきたのはカラフルな服を着た道化の青年だった。といつても同じような見た目の人には辺りに何人もいたので場違いとは思わなかつたが。道化は指を鳴らして水の玉を作り出すと、それをシャボン玉に変えて見せる。

「サービスだよ、受け取つて」

シャボン玉に紐をつけて風船のようにすると、リトルにウインクしながら手渡した。リトルは元々道化の顔立ちもよかつたからか、嫌な気はせず彼に好感を持てた。

「この街はもう国つて言つていいほど広いからね、飲食店や遊園地、服屋に宝石、なんもあるよ…」

「飯屋か！？」

サモンが目を輝かせて反応したので、道化はニコニコ笑つて続けた。

「じゃあ特別に街を案内してあげるよー、どんなところに行きたい？」

当然サモンは飯屋と叫んでいた。リトルはどこが良いかと少しの間悩んでいた。二人共少しも疑うことにはなかった。

「少しいいかな」

「なんだよ……！？」

道化の後ろから甲冑に身を包んだ騎士が話しかけてきた。振り向いた道化は一瞬にして青ざめた顔になり、その場から一目散に逃げ出した。騎士は人混みに紛れて逃げていく道化に対して何もせず、ただ見守っているだけだが、すぐに別の兵士が数人で取り囲み、あつという間に道化は後ろ手に縛られてしまった。

いきなりの出来事に、一人は驚きを隠せない。

「……遅かつたじゃないか」

道化に話しかけた騎士が兜を外すと、下から口髭を生やした男前の顔が見えた。そう、彼は少し前に洞窟から町まで送つてもらった都市トールの騎士、ジンだつた。

「ジンのおっちゃん！」

「よく来た、サモン君、リトル君！」

ジンはサモンの頭を撫でていた。ジンが大人びて、サモンは子供じみて見えるので、はたから見るとまるで二人は親子のようだ。

「でもなんであの人を捕まえたんですか？」

リトルが不思議に思つて尋ねたので、ジンが困つた顔をして答えを返す。

「彼は過去に何度も、旅人を案内するふりをして誘拐や窃盗をしていたのだ」

「誘拐！？」

「そう。あの流れで仲間のいる場所に誘い込むと、大人数で取り囲んで捕まえる手法だ。盗めるものを盗んだらその後は奴隸として売られる……なんとも非道な奴らだ。」

リトルは道化についていった事を考へるとゾッとした。その心境が表情に出していたので、ジンがフォローとして付け加える。

「あれはこの街のほんの一画……もつといい部分もたくさんあるのがトルだ」

「美味しい飯屋はあるのか！」

さつきからずっと同じ調子のサモンに笑い返すと、ジンは兜を抱えて言つた。

「ではこの前にした約束通り、昼御飯をこ馳走しよう！」

ジンは部下の兵士に兜を渡して、しばらく別行動をとる皿を伝えた。兵士は敬礼の後に捕まえた道化を連れて行つた。

ジンはリトル達と大通りから少し離れた場所にある、赤い屋根の店に連れてきた。看板には「炎の雑貨屋」と書かれている。

「なあ、飯屋じゃないのか？」

「大丈夫、知り合いの店だ」

ジンが店の中に入ると、ドアについたベルが小さく鳴つた。続けてサモンとリトルが入つた。店内は少し薄暗く、見たこともない小さな道具が所狭しと並んでいる。だがどこにも人の気配はしなかつた。

「ゲンショウ、いないのか？」

「……あいよつ」

すると奥の部屋に続く扉が開き、金髪のリーゼント男が入つてき

た。

「お、ジンの兄貴！　久しぶりじゃあないっすか！！」

「おい、三日前に来たはずだが」

リーゼント男は「そうだっけ？」ととぼけていたが、本当に忘れたわけではない。そして男はサモンに近づくと、ガンを飛ばしながらじつと目を見て言つた。

「俺はゲンショウ、よろしくな」

サモンは怖い顔に一つも気圧されることなく「よろしくー」といつもの笑顔で返す。するとゲンショウは一カツと笑い、オレンジの頭をポンポンと叩いた。

ジンはゲンショウに手合図で何かを伝えると、彼はつなぎで奥の部屋に入った。

「さ、君たちも中に」

ジンが一人を連れて中に入つていった。

「そこに座つて待つてろ、すぐに作つてやるからなー。」

奥の部屋は畳が八畳敷いてあり、真ん中に大きめのちゃぶ台があった。そして隣の部屋が台所でさつきのリーゼント男がエプロンをして立つている。

「ゲンショウはあんな髪型をしているが、料理が得意でな。そこらの店より美味いんだ」

「おだてすぎつすよ兄貴！」

テンポのいい包丁の音をたてながらゲンショウが返事を返した。

「ねえ、なんで兄貴つて呼んでるんですか？」

リトルが慣れない畠に違和感を感じながらも、気になる事を聞いてみた。

「それはだな、三年前、俺はこの街の暴走族の頭はつてたんだ。その頃は騎士との衝突もよくあってな、ジンの兄貴とはその時初めて知り合つたんだ」

ゲンショウがフライパンに材料を放り込みながら話を続けた。

「始めはうざい奴と思ってたんだがな、ある日俺と親友が事故つて死にかけた時、一番に助けてくれたのが兄貴だつたのさ。それから兄貴には色々世話になつて、俺は族をやめることができたのさ」

「ふーん」

サモンがあつけない返事をしたものだから、台所から殺氣と共にナイフが飛んできて、サモンの頭を掠めて壁に突き刺さつた。

「…………」

「……すまねえ、つい昔の癖が」

するとジンが鬼の形相でずかずかと台所に入り、ゲンショウの襟首をつかむ。

「あれほどキツいお仕置きをしたのにまだその癖が出るのかつ！」

「すすす、すいません兄貴！ ほんとすいませんなん……！」

「この前もその癖で客を追い返したそつじゃないか……！」

「ギャアアアアアッ！！」

ジンはゲンショウのこめかみに拳骨を、中指を少し尖らせて押し込んでいた。壮絶なお仕置きにゲンショウはらしくない悲鳴を上げ、リトルは思わず口を反らす。サモンは青ざめた顔でナイフとゲンシヨウを交互に見る、そしてジンを。

「この人達を怒らせてはいけない。一人は本能的にそう思った。

「ああ、できたぜ」

ちやぶ台に水と白米、それに赤々とした料理が四人分ならべられた。

「俺様特製、炎のエビチリだ。沢山食つてけよ！」

「いただきまーすっ！！」

サモンが早速料理を食べた。一口、二口と食べていゆと、怪獣のように口から勢いよく火を吹き出し始めた。

「あちーいっ、けじうまいいっ！」

「だろ！？ 嫁ちゃんのは辛さ控えめにしてあるから、安心して食べな！」

リトルのエビチリは確かにピリッと辛い位だった。しかし甘酢と辛さの絶妙なバランスが、味わい深いものにしていた。

「美味しいっ！」

「さすがゲンショウのエビチリ。この辛さが病みつきになるんだよな！」

いつもの顔つきに戻ったジンも、エビチリを火を吹きながら食べている。ゲンショウは満足そうな三人を見てニカツと笑い、自分の分を食べ始めた。

「そういうやあ、お前らはなんで旅してるんだ？」

「兄貴を探してるんだ！」

サモンがご飯をリスのように頬張りながら答えた。よく普通に喋れるなどジンが感心する。

「へえ、人探しか。嬢ちゃんは？」

「私も人探しなんです」

するとゲンショウは少し考えた後、チラシの裏紙とペンを取りだし一人の前に置いた。きょとんとしている一人に彼が言う。「特徴書きな。この街にいるんなら、俺が見つけて連れて来てやる！」

「本当か！？ でもなんで急に……」

「理由なんて要らねえよ。ほら、食い終わつたらでいいから書けよ」

「ありがとう、ゲンショウさん！」

感謝されて多少のぼせてしているゲンショウに、横からジンが茶化して入る。

「らしくないな、いつからそんな親切になつたんだ？」

「あ、兄貴！ コーフォーが！！」

ゲンショウは照れてしらばつくれると、エビチリの続きを食べ始めた。ジンもニコニコしながら続きを食べる。途中何度も火を吹きながら、四人は楽しく昼御飯を食べていた。

「それじゃ、何かわかつたら連絡するぜ」

ゲンショウは特徴の書かれた裏紙をサモン達から受けとる。

「でも一人で探すのか？」

「いや、元裏街の仲間を使って……」

「裏町？」

そこまで言つたゲンショウは、ふと一人が旅人だった事を思い出す。

「そうそう、この街は三つの地区に別れていてな。一つは俺達の今いる表街、ここはいろんな奴が住む街のメインだな。そして街の中にある魔法街、ほら、あの高い塔の回りさ」

ゲンショウが指を指すと、窓の向こうに入り口で見た塔が見える。「んで、最後に裏街。ここはまあ、不良の溜まり場みたいなどころでな、俺もその住人だったわけだ」

まあ魔法街と裏街は普通にや入れねーから気にすんな。と付け加え、ゲンショウは腰に手を当てて胸を張つた。

「とにかく、俺が頭はつてた頃の仲間がいるから、そいつらに聞いてみるってわけだ！」

「人に頼むのに、なんで胸張るんだよ」

サモンが喋つた次の瞬間、今度はスプーンが頭を掠めた。勢いがよすぎてスプーンも壁に刺さり、壁に本日二つ目の傷をつけた。当然二度目のお仕置きも行われた。

「とりあえず、ありがとうございました」

「気にすんな。それより、そんなでかい荷物もつて、街をぶらつくのか？」

ゲンショウがサモンの背中を指差して言つた。荷物は主に食料品だがサモンの食べる量が半端じゃないので、リュックにはちきれんばかりに詰め込んでいたのだ。

「どうせ宿もないんだろうし、しばらくここにいりやいいじゃねえ

か

「いいのか、ゲンショウ！？」

驚くサモンの頭を、ゲンショウは笑いながらガシガシと強くなだた。

「じゃあ早速、街巡りしようぜー！」

サモンが荷物を置いて立ち上がる。リトルも街巡りにはわくわくしていた。

「泊まる所まで貸してもらつて……」

「だから気にはすんな！ とりあえず街巡り、楽しんで来いよなー！」

「はいっ！！」

二人は元気よく店を出て大通りへ歩き出した。

「……兄貴」

「ゲンショウはジンに言つ。

「あのサモンってガキ、凄いつすね」

「何が凄いのか理解していないジンに、彼は説明した。

「俺が挨拶したとき眼から『全力で魔力をぶつけてた』のに、あいつはびびる事なく笑顔まで作つて見せやがった……あの歳での力、裏街に行つたらヤバそうだぜ」

しかしジンは少し笑つて、何も心配ないと言つ。

「確かに洞窟を破壊する魔法といい、凄い力だ。だが裏街への道は兵士がいるし、やすやすと通れる場所ではなかろう」

そう言って、ジンも店を出る。

「では私は勤務にもどる。人探し、頑張れよ」

「おうよー！」

ジンとも別れて早速特徴の書いた裏紙を見たゲンショウは、「よしつ」と気合いを入れて走り出した。

都市と出会いと児の供

サモン達はゲンショウの家に荷物を預け、魔法都市の大通りを散策することにした。

レンガの敷かれた道を大勢の人が行き交い、その両脇を様々な店が並ぶ。そして遠くにそびえ立つ、立派な塔。どれも星屑を振りかけたように、キラキラと輝いて見えた。

「キレイな街……」

リトルが目の前に広がる景色を見て、思わずうつとりとした。この街にいると自分もキレイになつたようで、とても気持ちがよかつたのだ。

「ねえ、サモンもそう思つでしょ？」

リトルが横を見たが、さつきまでそこにいたはずのサモンがいない。辺りを見回すと、駄菓子屋の前で目を輝かせている子供がいた。「ちょっとサモン、せっかくのムードが台無じじゃないの」「ムードじや腹は膨れないぜ」

「もうつ！」

頬を膨らませて怒るリトルは、近くの街灯にもたれてサモンを待つことにした。どうせ気が済むまでお店の前を離れないだろうし、無理やり引っ張つていくほど急いでないからだ。

サモンは駄菓子屋に立ち並ぶお菓子を、五歳の子供のように目を輝かせて覗いていた。狭い空間に並んだ棚にはぎっしりと商品が並び、キラキラと輝いているように見える。

「坊っちゃん、旅人かい？」

サモンがじろじろと品物を眺めているものだから、普段店の中に座っている店主の老人が顔を出してきた。サモンはよほよほの老人に、指をブイの字に立てながら言った。

「じいちゃん、この店で一番いいものの、一つくれないか！」

「ほいなら、これ持つて行きなせえ」

店主の老人は紙袋から砂糖を一握り手にのせると、息をフツと吹きかけた。その息は手の上で炎になり、砂糖をドロリと溶かしてしまう。すこく熱いはずなのに涼しい顔をした老人は、両手を巧みに使って砂糖を引き延ばし膨らませ、細く長く広げた。

もう一度息を吹きかける。すると今度は強めの風になって、細く長く広がった砂糖を一気に膨らませ、何十にも絡まつた糸に変化させていった……。

「すげえ」

サモンの目の前で広げられる魔法は、砂糖を七色に染めていく。仕上げに割りばしへ膨らんだ砂糖をまとわせると、透明な袋に包んで渡してくれた。

「ほれ、できたぞお」

「ありがとうじいちゃん！」

それを受け取ると、サモンはお金を払つてすぐに駆け出していくた。

「リトルっ！」

「もう、遅いよ」

近くの街灯にもたれていたリトルはふてくされながらサモンを迎えた。

「店のじいちゃんが魔法でちょちょいと作ってくれたんだぜ！」

さつき買った駄菓子を袋から取りだしたサモン。その手には、割りばしの先に広がる虹色の綿あめがあつた。

「じいちゃんが息を吹いたら、それが炎になつてさ、両手でいい…

…

老人の真似をして手を動かす彼の動きは、伝えようと努力しているのはわかるが、どこか子供じみていて可笑しかつた。リトルがクスクス笑うと、今度はサモンが怒る。

「なに笑つてるんだよお

「別につ！ それより早く食べようよ」

リトルは袋を取つて、匂いを嗅いでみた。甘い砂糖の匂いの中に、何故か違つた匂いが混じつてゐる。それはイチゴやブドウ、バナナなどのフルーツの匂いだ。さらに一口食べると、ふんわりと広がる甘味に乗つて、さつき匂つたフルーツの味が、味わう度に口いつぱいに広がつて……とても不思議な味を出していた。一言で言うなれば「美味しいつ！」

これに吸きこむであらう。

「それじゃオレも、いつただきまー……」

「ゴツン

「痛つ！」

サモンが大きな口を開けて、綿あめを頬張ろつとした時、道を歩く男の腕が、綿あめを持つ手にぶつかつた。男は急いでいたのか結構なスピードで歩いていたので、小柄なサモンはしりもちをついてしまつた。

「すみません。大丈夫ですか？」

ぶつかつた男は黒いローブを全身にまとい、深く被つたフードが顔を隠していた。しかしサモンが転んだ状態で見上げると、ちょうど男の顔が見える。

不気味に輝く黄金色の瞳が。

「サモン、大丈夫？」

リトルの気遣いも、頭に入つて来なかつた。サモンの意識を全て惹き付ける瞳は、幼い頃に別れた兄を思い出させる。

「お前、もしかして」

「急いでいるので、失礼」

サモンの言葉を遮るように男が言つと、間髪入れずに走り去つていつた。

「待てよ！」

サモンが男を追いかける。その後ろを、驚きながらリトルがついてきた。

「サモン、あの人知り合いなの！？」

「ああ……兄ちゃんと一緒に旅に出た奴だ！」

「それってもしかして」

手に持った綿あめを袋に戻しながら、サモンは走った。

「兄ちゃんに、会えるかもしれない！」

兄に会えるという希望を胸に。

男は明るい大通りから横にそれた、薄暗くじめじめした路地に入つていった。その奥、数分走った場所にある空き地で立ち止まると、後ろから追いかける少年を迎える。

「やつと、追い付いたつ……」

数秒遅れてサモンが現れた。肩を大きく動かしながら、手を膝について呼吸する。

「お久しぶりですね、サモン様」

黒いローブの男は、人が出しているとは思えないほど低い声で話しかけてくる。

「ぶつかつた時から気づいてたんだろ」

サモンは呼吸を整え、ゆっくりと身体を起こした。ギラリと光る黄金の瞳がそれをみつめる。

「……デーモン」

男、デーモンは名前を呼ばると、深くかぶつたフードをおもむろに取つた。青紫の髪が肩まで伸びていて、それは先端に行くにしたがつて赤く染つていた。長い髪の間から、不気味な黄金色の瞳がにやついている。

「兄ちゃんはどこだ！？」

サモンは希望にみちた瞳で問いかけた。

しかし……『テーモンはタトゥーの少年に、静かに告げた。

「貴方をコール様に会わせる訳には、いかないのですよ」

『テーモンが左手を振り上げると、半透明な壁が現れた。それは空き地の四方を瞬く間に囲んでいき、サモンの逃げ場所を無くす。

「気付かなかつたのですか。貴方だけがついてこれるよう、私が逃げていたことを！」

その言葉にあわてて後ろを振り向いたサモン。悪い予想が的中した。

「サモン！？」

壁の向こうに、リトルの姿が映っていた。

続く

悪魔とサモンと敗北

路地裏を駆け回り黒服の男を追いかけるサモンを、リトルは必死で探していた。

「サモンってば、どこに行つたのよ」

途中までは彼の背中を追つて走っていたのだが、落ちていた空き缶を踏んでしまい顔から転んでしまった後、すっかり見失ってしまったのだ。

まだ昼間だというのに、人っ気のないマンションが立ち並ぶ、日陰の多い道は、なんだか暗くて寒い。

「うう……早く見つけて、戻ろう」

よし、と自分に喝を入れてから十字路を見渡して、とりあえず右側の道を走り出した。もちろんあてがあるはずも無く、リトルの勘一つで決めたことだが、迷っているよりよっぽどいい。

そんなことを考えていると、遠くに見慣れた少年の後ろ姿が見える。

「サモン！ 置いてくんなんてひどいじゃない、の……？」

リトルはそう叫びながら近づいていったが、距離が縮まるにつれて、その不穏な空気を肌で感じ取った。

半透明の壁を隔てて見えたのは、デーモンの歪んだ笑顔。

「サモン！？」

壁を触れる距離まで近づくと、サモンが氣付いて振り返る。

「リトルっ！」

その様子を傍観していたデーモンは、まだ歪んだ笑顔を浮かべている。リトルはそれが不気味で気持ち悪くて仕方なかつた。

「サモン、本当にその人、知り合いなの？」

リトルが壁越しに見える男を指差して言った。それに反応した男が、不満げに眉をひそめたて言つた。

「失礼な方ですが、私はサモン様のお兄様、コール様の召喚獣です」

リトルは信じられなくてサモンを見たが、彼が否定しないといふ

を見ると、デーモンの言葉は真実らしい。

「五年前のコール様と旅に出る口までは、よく遊び相手に選ばれましたよ」

「ああ、そうだったな」

サモンが相づちを打つてから、質問する。

「そんなお前が、なんでこんな事するんだ？」

壁を強く叩いたサモンは、男に怒りの視線をぶつけた。

デーモンは青紫の髪をまくし上げて、視界を遮っていた前髪を左手で押さえた。そうすることでの、黄金色の瞳がはっきりと見えるようになる。

サモンを試すように、その瞳は輝いていた。

「今度は、私が遊んでもらおうかと思いましてね」

デーモンは今までロープに隠していた右手を露わにした。黒い布から出たそれは人間の形をした左手とは違い、黒い肌に赤く長い爪、長さは左手の倍もある異形な物だった。

「この長さを隠すために、普段は折り畳んだままなんですよ？ こうして伸ばすのは久しぶりになりますね」

語りかけるように独り言を呴きながら、肩を回したり手を広げたり。右腕を動かす度にビクリと怯えるリトルの反応を、デーモンは楽しんでいたみたいだった。

「さてサモン様、そろそろ始めましょう。この状況、何をするかは分かるでしょう？」

目の前に敵、逃げ場はない。サモンは閉じ込められた時、すでにこうなる事はわかっていた。

腰の剣と、ポケットのカードを手に持つ。

「オレが勝つたら、兄ちゃんの居場所を教えてもらひや！」

「さて、私に勝てますかな！？」

デーモンは地面を走る、というより滑るような足取りでサモンに急接近すると、その不気味に伸びた右腕を、大きく振りかぶった。

それと同時にサモンは叫び、紅い竜を呼び出す。出てきた竜は異形の腕を、細い両前足で受け止めた。

「ディノス……お兄様から託された紅い竜ですか
ぼそぼそと呟いたデーモンは、竜の手を振り払い後ろに下がった。
「うあああっ！」

竜が頭を低く下げる。同時にサモンが剣を一層強く握り、紅い竜を飛び越えてデーモンに斬りかかった。

「そうだ、あの田からずつと、兄ちゃんを追いかけてきたんだ！」
剣を赤い爪で受け流したデーモンは、サモンの腹めがけて、左拳を振った。

それに合わせるようにサモンはひざを上げて、向こうずねで拳を受ける。さらにその勢いを利用して後ろに跳ねた。

「いくぞディノ！」

サモンが竜の背中に飛び乗って、狭い空へと飛び上がる。

「ディノ？……召喚獣の本当の名も知らないとは。貴方それでも召喚師ですか？」

デーモンはそう言つと、左手を広げて力を集めた。その力は黒いもやとなり、次第に大きくなつていく。

サモンはちょうど男の真上にきた時に、竜の背中から勢いをつけて、さらに上へと跳んだ。

「らあああっ！」

跳んだ先にあつたのは半透明な天井だった。それを逆さまになつた状態で蹴り、剣を突き立ててデーモンの脳天へと急降下する。

「見え見えです」

デーモンはすれすれの距離まで引き付けてから、一步だけ下がつて回避した。そこにサモンが隕石のように落ちてくる。

空き地の土が舞い上がり、煙幕のように広がった。

「まだまだ！」

土煙を払つてしまふかのような叫び声が合図となつて、空にいた竜が火炎弾を発射する。それが土煙のせいで見えなかつたデーモン

は、ほんの一瞬だけ反応が遅れた。

空き地を猛火が包み、その熱と光が辺りに広がった。

視界を遮っていた土煙が消えると、右手を上に広げて立つ、不気味な悪魔の姿があつた。

その手のひらから、焼けた臭いと煙が立つている。

「なるほど。貴方は囮で、本命はこちらでしたか」

デーモンは距離をとつた少年を睨み付ける。サモンは空き地の隅にケロツとして立つていた。

「……こりやだめだ」

サモンは握っていた剣を放り投げた。その刀身はさつきの攻撃で折れて半分になつていて、片割れはデーモンの足下に突き刺さつたままだつた。

「降参しますか？」

「しないよ！」

その言葉に「ほお」とだけ反応したデーモンは、左手をサモンに向ける。

「武器を失つても、私に勝つおつもりですか」

サモンは体についた砂を払いながら言つ。

「ああ、兄ちゃんの居場所を聞くまでは！」

それを合図に、サモンは素手で走り出す。デーモンは左手に貯めていた黒い力を解放し、サモンに向けて飛ばした。彼はそれをヒラリとかわし、男に突進する。

すかさずデーモンは長い右腕を振り上げた。その腕の長さは、サモンの攻撃が当たる前に届くだろう。そのリーチが厄介だった。

「ディノ！」

サモンの呼び掛けに応じて、空を飛んでいた竜がデーモンの後ろから飛びかかつた。

しかし、

「……甘い」

「デーモンがくるりと向きを変えて、紅い竜を睨んだ。そして右腕を思いきり、地面にめり込むほどの力で叩く。

紅い竜は一瞬の悲鳴の後、ホタルの光となって四散した。サモンは竜がやられたことに苦い顔をしたが、勢いを緩める事なく男の背中に飛びかかる。

「だから、甘いのですよ」

デーモンが不気味に笑った瞬間、サモンの背中に激痛が走った。かわしたはずの黒い力が、ブームランのように空中でターンして、サモンの背中にぶつかつたのだ。

「やはりまだ子供ですね……」

「デーモンが呟く。だがサモンにはそれが聞こえない。

背中が焼けるように痛み、痛いという感覚以外を遮断していた。立っている事さえ叶わず、その場に崩れおちる。

「あ…………」

言葉にならない音を出しながらもだえた。痛みの限界がきたのか、まぶたが重たい。

薄れゆく意識の中で、なんの感情も抱いていない黄金の瞳と、壁を叩きながら叫ぶ少女が見えた。

「…………サモン！」

リトルは目の前にある壁を突き破って、サモンに駆け寄りたい気持ちでいっぱいだった。

「サモン、サモン！？」

何度も名前を呼んだが、返事はなかつた。地面の上をもがいでいるサモンは今にも死にそうで、直視するだけで痛々しかつた。

それを間近で見下していたデーモンに、リトルは泣きそうになりながら叫ぶ。

「あなた、サモンの知り合いなんでしょう？　どうしてこんな事する

のよー」

「デーモンはリトルの言葉を無視して、闘いで乱れた青紫の髪を左手で整えた。

「覚醒しないな、やはりまだ幼いか」

そして、左手をサモンに向ける。その手に魔力が集まつていった。

「もうやめて、攻撃しないで！」

また攻撃するのかと思ったリトルが、壁の向こう側で堪えていた泣をとうとう溢れさせた。

「…………」

それを横目で確認した男は左手の魔力を、白い、癒しの光に変えた。

悪魔が放つ癒しの魔法は、サモンの背中にある傷と痛みを和らげる。さらに空き地を囲っていた壁も消して、デーモンは余韻を楽しむようにたたずんでいた。

「サモンっ！」

リトルが彼の元へ走りよる。氣は失っているが、表情は穏やかでほっと安心する。

そしてリトルは、不可解な行動をとった男を見つめた。

「なんで傷つけたり、助けたりするの……？」

その問いかけにデーモンは、気絶しているサモンを見ながら答える。

「サモン様には、死なない程度に死んでもらいたいのですよ。それが私の目的であり、狙いでです」

言葉の意味をリトルが理解できないまま、デーモンはフードで顔を隠して立ち去った。

サモンが目を覚ますと、不安げに顔を覗くリトルの姿があつた。

「よかつた、気がついたのね」

リトルが安心してため息をつく。しかしサモンは辺りを見回した後、自分の手のひらを見ながらうつむく。

「……そっか、負けたんだな」

ぼそりと呟いたサモンは、手を握りしめた。強く、固く、何かの感情を表現するようで、押さえつけるように見えた。

リトルはただ黙つて彼を見ていた。

さつきまで晴れ晴れとしていた空は、どんよりとした灰色の雲に覆われていた。

続く

兄と思ひと降り始めた雨

魔法都市トールは土地が円形になつていて、外側から魔獣避けの城壁、居住区と裏街、魔法街に区分けされ、そして都市の中心にそびえ立つのが魔法塔バベル。登れば街の隅々まで見渡せる高い塔の屋根に、コールは風になびくロープを手で軽く押さえながら立っていた。

夕陽色の髪と曇天の空のミスマッチ。遠くから彼を見つけたなら、それは鈍く光る悪魔の瞳に見えるだろう。しかしこれから雨が降るという天気の中を、空を見上げて歩く者などいない。塔の屋根にたたずむコールは、うつむいて歩く人の流れを憂鬱そうな目で眺めている。

その曇った瞳は、回りと同じようにうつむいて歩く少年と、その横にいる少女の姿をとらえていた。

「……サモン」

「コールの呟きは雷鳴にかきけられ、それを合図に天が涙を流す。

「必ず、お前は死なせないからな」

コールは雨に濡れるのも構い無しに、少年の姿が見えなくなるまでその場から動かなかった。

兄の瞳は悲しみで、弟の瞳は悔しさで、今の空を映したようじょどんでいる。

「明日はどうやら降りだらうな」

コールは憂鬱になりながらつぶやいて、塔の屋根から飛び降りた。

サモンと竜と二人の侍（前書き）

* 瀧先生の「Vivre toute ma vie」とのコラボを始めました。

ハヤト、ヒロキは瀧先生の作られたキャラです。

サモンと竜と一人の侍

家についてから数十分、サモンは店の屋根に上って空を見上げていた。相変わらずの曇天は雨をこぼさないよう必死でかかえていた。ようだつた。

「サモンっ」

不意に下から声がする。見るとな闇からコトルが心配そうな顔で立っていた。

「先に寝るね。サモンも早く降りて寝なさいよ。」

リトルは言い終わるとすぐにうつむいて、いたたまれない気持ちで家に入つていった。サモンは彼女の姿が見えなくなるとまた空を見はじめた。星一つの輝きすら見えない。

ポツリポツリと、雨の音がする。

「そんなに悔しいか、サモン」

耳に聞こえた男の声。それはあのテーモンの声にどこか似ていて、全く違う声だ。

サモンは声の主をポケットから取り出した。紅いカードがほんのりと光を発してくる……声はここから、頭の中に直接聞こえてくる。「悲しみにくれることはない。お前の気持ちがよければ、いつでも飛ぶよ」

「…………」

サモンは無言のままカードを降り下ろした。紅く輝きを放つ鱗がすぐに竜の形を作り上げ、共に戦つてきた戦友が現れる。それは主人の心に影響を受けて悲しそうな瞳をしていた。

「いこう、雲の向こうへ

翼を広げて空を目指す竜に、少年は首に手を回してしがみついた。音もたてずに飛び上がり、ぐんぐんと高度をあげていく。高く高

く、下をみれば次第にゲンショウの家が小さくなり、大通りが見えて、民家からは無数の光が漏れて星のような景色になつていった。

さりに竜は上がり続ける。とうとう灰色の雲に突つ込み、雷があちこちで鳴り響く。サモンは目をつぶつて数秒間、雲から抜けるまで耐えた。

そして上空。厚い雲の上にたどり着くと、そこには星が、地上でみるより数万倍も美しく輝き、一面に余すところなく広がっていた。星の世界を竜はのんびりと飛び続ける。

「ありがとな、ディノ」

少年は紅い竜の鱗をなでた。金属みたいな冷たさと、皮膚のような温もりを兼ね備えたそれは、星の光を浴びて真紅に光る。その上に、また雨が少し降つた。

サモンが空から降りてくると、街の灯りも半分くらいに減ついた。円を描きながら滑空して降りていく竜とサモンは、行きと違つて晴れた顔をしていた。

下を眺めて家を探していたサモンだったが、賑やかに声がする場所に目がいった。

「……ん？」

よく見ると賑やかといつかなんというか、一人の少年を取り囲むように数人の男たちがぞろぞろと群がついていた。

「ディノ、あれ！」

直感的に襲われていると思つたサモンが、竜に目的地を指し示す。その一言で竜は滑空をやめ、放たれた矢のように降りていった。

「うつ……」

「大丈夫かヒロキ！」

ハヤトは木刀を構え、敵を見据えたまま友を案じた。ヒロキはすぐ立ち上がり、汚れた袴をパンパンと手で払う。和服という珍しい姿をした少年は今、むさ苦しい男たちに囲まれていた。

取り囲む男たちは一様にみすばらしい服装で、汚れきった服に穴の空いたズボンなど、決していい生活をしているとは思えない外見だった。やはり行動のほうも粗暴で、今も手に角材や木刀を握つてへらへらと笑つている。

「お前ら何なんだ？」

「俺たちは雇われ兵さ、あんたらの首にかかる賞金田当てのな！」やつちまえというリーダーの一声で、少年一人に大の人たちが飛びかかる。しかし彼らにかかれば、力だけで振り回している武器をかわして、体に木刀を叩き込むことは朝飯前だつた。

たつた一振りで迫る敵を廻ぎ払い、リーダー以外の男をいとも簡単にノックアウトさせた少年たち。洞爺湖と彫られた木刀が、闇夜に煌めく。

「おい、お前」

倒れた男の顔近くに木刀を突き刺したハヤト。耳元でドスッとう音が聞こえて、男の顔から血の気が一気に引いていく。

深い緑色の髪をしたハヤトが凄みをきかせて怒鳴つた。

「お前らみたいなのを『鳥合の衆』って言うんだよ……おととい来やがれ！」

その一言で敵の戦意は一気になくなり、男たちは尻尾をまいて逃げ出した。まだ戦つてもいいリーダーすら、仲間の逃走についていく始末だ。

「情けない奴等だなー」

ヒロキが言う。ちなみに少年二人はまだ十七歳、一回り以上も離れた大人の逃げる姿が、彼の目には滑稽に映つた。

「だけどハヤトも格好つけすぎ」

「悪かつたな……それより雨がくる前に帰ろうぜ」

そんな他愛もない笑い話をした一人は、木刀をしまい帰路にたつ。その瞬間、ブォンと背後から土煙が上がった。二人は身の危険を感じて振り向くと同時に距離をあける。

「……おい

「まじかよこれ

少年たちの目の前で、紅い竜が翼を広げて吼えた。そんなに体長は大きくないのだが、突然現れたのと翼のおかげで、数倍大きく感じさせる。

初めて見る生物に面食らつたハヤトとヒロキは、夜の街で思いきり叫んだ。

「なんじゃこりゃああああああああ……！」

「あれ、終わったのか？」

サモンが竜の背中から飛び下りた。その姿にびっくりした一人がまた叫んだ。

ハヤト&ヒロキ&ミヒリ（前編）

* 灘先生の「Vivre toute ma vie」とのコラボをしています。

ハヤト、ヒロキ、ミヒリは灘先生の作られたキャラです。

ハヤトヒロキとミエリ

次の日。

「で……」

ヒロキは不満げに田の前で繰り広げられている光景を見ていた。
少し広めの部屋にあるテーブルにヒロキとハヤト、そしてサモンが
座つてご飯を食べている。

「さすがミエリさんの煮豆、いつもおこしいな」

「おかわりっ」

テーブルの上には手作りの料理が
物が主に ズラリと並んでいて、それをハヤトとサモンがせつせ
と口に運んでいた。

ちなみにここはヒロキの自宅だ。

「よく食べるのね、作りがいがあるわ～」

キッチンからサモンのおかわりを持つて、二十歳過ぎくらいいのヒ
ロキと同じ茶髪の女性が現れた。彼女は桃色の和服に身を包み、見
事なまでに整つた顔立ちとしなやかな曲線を描く体をもつ、艶^{あで}やか
で美しい容姿をしていた。

「ハヤト君以外のお友達なんてめつたに来ないものね～」

そう独り言を呟いた彼女はサモンの茶碗にご飯を入れてあげる。
サモンの注文で、白米を山のように盛つて。

「ありがと！ 姉ちゃんの名前は？」

「小畠ミエリよ。お姉ちゃんなんだなんて……嬉しいけど私は三十五、
もうおばさんなの」

「ふーん、そんな風には全然見えないぞ？」

「ありがとう」

ミエリは笑顔を返した。この表情を見てだれが三十路を過ぎたお
ばさんと思うだろうか、とこづほど若々しい彼女は、実はヒロキの

母親だつたりする。

「なんだかヒロキの弟ができたみたいね～。サモン君はいくつなの？」

「十八！」

「あら、それじゃヒロキのお兄ちゃんね。ヒロキ、今日一田サモン君のこと『お兄ちゃん』って呼びなさい！」

「なんでそつなるのぉおお！？」

息子にむちゅくちゅ言いの母親。しかもミエリは結構真面目に言つてゐるので恐ろしい。しかしさすが母親といつのか、ヒロキが怒るギリギリのラインを狙つて話をするので喧嘩にはならない。

「サモン君、服も汚れて所々穴もあいてるし……あとで繕つてあげなきや！」

そんな中、一人熱が入るミエリだった。

それといつのも昨晩の出会いの後帰り道がわからなくなつたサモン。紅い竜は空腹で召喚できなくなつていたので空を飛んでいくこともできず、深夜に外へ放つておけないとハヤト達が家に泊めてあげたのだ。

朝食も終わりミエリは片付けに勤しむとこり、サモンとハヤトは部屋でのんびりと過ごしていた。ヒロキはミエリの手伝いだ。

「いやあ、皿かつた！」

「ところでサモン、地図あるけど帰り道わかるか？」

「うーん……この街には旅で来たばかりだし、ゲンシヨウの店としかわかんねえな」

「ゲンシヨウさんのお店なら知ってるわよ～」

ミヒリの声がキッチンの方から聞こえてきた。そしてすぐに彼女がこっちに来る。

「ここからちよつと遠いけど、ゲンショウさんの所へ行くの？」

「あー！仲間もそこにいるんだ」

ミヒリが「そうなの」と返事をしたと同時に、キッチンからヒロキの叫び声が響く。

「ハヤトー、手伝ってくれよー。」

「おう」

一つ返事でハヤトがキッチンに向かう。そのおかげで、部屋にはサモンとミヒリの二人だけになった。

「サモン君……」

「何だ？」

ミヒリが少し寂しげな表情で、サモンを優しく包み込むように抱き締めた。

「隠しても私にはわかるわよ、何か辛いことがあつたんでしょう？」

「えつ……」

話してじらふ、とミヒリがさやぐ。彼女にはサモンが空元氣でいることがわかつていた。

サモンは初めは不安と疑惑で黙っていたが、ミヒリの温もりを感じてこらるうちに、氷が溶けるようにゆっくりと話し出した。兄を追う旅で、手掛かりのデーモンとの戦い、そして敗北。

「……そうなの」

サモンの話を最後までしつかり聞いていたミヒリは、抱き締めたまま優しく言つ。

「サモン君、戦いつていうのはね、勝ち負けじゃないのよ

「違うの、か？」

「うん。本当の戦いは『何を得たか』が大事なのよ。あなたは確かに負けてしまつたけれど、何か感じたものがあるはずよ」

「感じたもの……か」

サモンの心から、少しもやもやが取れた気がした。

「ヒロキ、なんで皿洗いに俺を呼んだんだ？」

一母ちゃんが一人で話したいってさ

- 15 -

人の気持ちを理解できる親子を、ハヤトは「いいな」と少しだけ思つて見ていた。

「わい、あとは母がせんじ立て……」

モジのズボンを脱がせられて、机の姿になってしまった。

「うああああ母ちゃんんんん！？」何やつてゐのねおおーー。」

「あひ口井 終わった？」

續林下集

エスチャードを繰り返す。

「サモン君のズボン、ぼろぼろだから繕つてあげようと思つて」

卷之二

卷之三

ミエリは笑顔で答えながらヒロキの替えのズボンをサモンに渡す。

それを当たり前のようほくサモン。

空いた口がふさがらないヒロキの肩を、ぽんとハヤトがたたく。

よがつたな、兄弟ができると

「よかねえだろ！！

限界が来てしまったのか、ヒロキは大股で家を飛び出した。

「待てよヒロキ……。そうだサモン、お前も来るか？」

「修行？面白そだしこそ！」

二人もヒロキの後を追つて家を出た。
さつきまでの騒がしさが嘘のよう、部屋は静まり返つていた。

三人は裏街の最も東側にある公園へとやつてきた。その道中サモンが見た景色は、華やかな大通りとは全く違つていた。

地面は舗装されておらず土のままでまわりの建物も古い掘つ立て小屋が並び、人の気配もほとんど感じられなかつた。公園も同じよう寂れつて、滑り台だつたのだろう鉄屑と固くなつた砂場、回りに倒木が並んでいてる光景は、とても子供が遊べる場所とは思えなかつた。

「さて、今日はこの辺りでいいかな」

ハヤトが公園の真ん中で立ち止まると、サモンの腰の剣を見て言う。

「サモンは正直なところ、強いのか？」

その事はヒロキも気になつていていたみたいで、サモンに背中を見せながらチラチラとこちらをうかがつている。

サモンは自信満々で答えようと思つたが、瞬間的にデーモンとの戦いが頭をよざる。そして無意識に、喉元まで出かかつっていた答えを飲み込んだ。

「……戦えねえってほどじやねーけど」

「そつか、なら手始めに下級笛でいくか」

ハヤトは懐から小さな笛を取り出す。それは勾玉の形をしていて、黄色に鈍く光つていた。

同時にヒロキが腰の木刀を抜いて構えをとる。その姿はさつきまでふてくされた少年ではなく、戦いに挑む剣士に早変わりしてい

た。

「それじゃ行くぜ！」

思いきり息を吸い込んでハヤトは笛を鳴らした。その甲高い音は公園中に鳴り響いて空気を振るわせる。

ぞわぞわと現れたのは、黒い体毛のネズミ達だった。

■ 滯在と風と組ごの刀（前書き）

* 滯先生の「Vivre toute ma vie」とのコラボをしています。

ハヤト、ヒロキは滯先生の作られたキャラです。

喧嘩と風と粗いの刀

黒いネズミはどこからやつて来るのかわからないが、公園の中央にいるサモン達の足元にうじゃうじゃと集まってきた。その数はざつと数えてみても數十匹以上いる……これだけ群れているとなんだか氣味が悪い。

ハヤトが木刀を腰から抜くと、それは少し風を帶びて応えた。

「ヒロキ、いくぞ」

「おうよ！」

ハヤトとヒロキはほぼ同時に動きだし、手元の木刀を振り抜く。刀身に纏った風の力で、十匹近いネズミを一発で吹き飛ばす。一撃目は突風、二撃目は迅風、三撃目は旋風と、木刀を振るたびに威力も増して、瞬く間にネズミ達を吹き飛ばしていった。

彼らの戦う姿は風と踊るよつて、いや、彼ら自身が風になつたかのように公園を舞つ。

「つし、いくぜ！」

サモンも彼らに負けじと、腰に差している折れた剣を力強く抜いた。

折れた剣は一振りで數匹一度に……とはいかないが、一匹一匹確実に倒していく。

ただ効率が悪いというか、ネズミ達の増える数の方が倒す数より断然多い為に、見えているネズミが一向に減らない事にサモンは段々とイライラしていった。

「おーい、休憩するぞ」

粗方ネズミがいなくなつた頃、ハヤトが木刀をしまつて声をかけ

た。彼は汗を一つもかかずに平然とした表情で残りのネズミ達をけちらす。

「休憩、か……」

一方サモンは小さな敵に翻弄され、全身にびっしょりと汗をかいていた。性格上ちまちまと敵を倒す事が嫌いなため、ストレスもすごく溜め込んだようだ。

「お疲れサモン、意外と戦えるんだな」「意外つて何だーっ！」

ねぎらいの言葉をかけたつもりだつたヒロキだが、爆発寸前のサモンに火をつける結果になってしまった。

「ま、まてよサモン、そういう意味じゃなくてだな」「うるせー！」

「ハヤト助け……ギャーーー！」

サモンは溜まっていた怒りを全てヒロキにぶつける勢いで頭に噛みついた。ヒロキが振り払おうと躍起になつて走り回る。

「おーい、休憩だぞー？」

「あーもう怒つたぞ、このバカ野郎！」

「おらあーっ！」

ハヤトの呼び掛けもむなしく、一人は兄弟のように喧嘩を続けていた。

「よし、休憩終わりっ」

休憩に入つてからきつかり三十分過ぎた。ハヤトが立ち上がりつぐと体を伸ばす。

「さ、続きやるぞー！」

ハヤトはそう言つたものの、隣にいる真新しいたんこじぶやあざをつけたサモンとヒロキは起きる気配もなく、溶けたアイスのよつこぐつたりと寝転んでいる。

「もー立てない、疲れた」

「オレもだめだ……」

「派手に喧嘩してたもんな、お前ら」

あきれてため息が出るハヤトに対して、寝ている一人は清々しい表情で笑っていた。こうして見ると本当の兄弟みたいだ。

「オレ、初めて喧嘩した」

「初めて……？」

サモンの一言に、ハヤトとヒロキは首をかしげた。

「兄さんいるんだろ？ 昔は一緒に過ごしてたんじゃないかな？」

「そうだけど、兄ちゃんはいつも優しくて、守ってくれるような人だったから。オレも喧嘩する気なかつたし、兄ちゃんもオレの言うことに反対しなかつたからなー」

サモンにとつて実の兄は尊敬の対象だった。それは兄と言つより父に対しての思いに近く、兄が旅立つその日まで、いろんな事を教わった師でもあった。

うつすらとだつたがそれを感じたハヤトとヒロキは、おのれのでサモンの兄を想像した。

そこに数人の男達がやつてきたのは、すぐ後の事だ。

「よおー、ハヤトくん」

「ん？」

名前を呼ばれてハヤトが振り向くと、鉄パイプやバットを持った汚れた服の男達がにやついて近づいてきた。彼らは昨日の夜、二人を襲つたゴロツキ達だ。

「昨日も来たよな……なんの用だ？」

ハヤトが目を細めて睨み付けた。左腰に差す木刀をすぐに抜けるよう手を軽く当てて。

「あんたに用はねえ。だがあんたの持つてるその木刀、そいつを欲しがる貴族がいてな……大人しく渡しな」

「やだね」

「……そつぱうと思つてたぜ！」

ハヤトが即答すると、その答えをわかつていていたように、「ゴロッキ達は奇声をあげて襲いかかってきた。

「とんだ修行になつちまつたなヒロキ！」

「こいつらじや修行にならないだろハヤト！」

一人は目を合わせて頷くと、木刀を力強く握り地面を蹴つた。

「この木刀は渡せねえよ！」

若い侍が吼えたと同時に、黒雲から轟音が響いた。

風を纏う一振りの木刀は、小さな竜巻となつて辺りの敵を蹴散らす。ハヤトが切り捨てた敵をヒロキが踏み台に飛び上がり、ハヤトの背後をねらう敵に突風を繰り出す。さらに着地する場所にハヤトの魔法で竜巻を起こし、ヒロキを守ると同時に敵を吹き飛ばした。そのコンビネーションは抜群で、迂闊に近づけばただではすまない。鉄のバットを木刀ではじき、棍棒を紙一重でかわす。そして空いた懷に渾身の一撃を打ち込む。防具と言える物をつけていないゴロッキ達はあっけなくバタバタと倒れていった。

「こいつら化け物か！？」

「くそつ……引き上げだ！…」

いくらも打ち合つていないどころか一撃もハヤト達に攻撃できなまま、ゴロッキ達はどたばたと乱れた足取りで公園を出していく。

「口ほどにもねえな」

ヒロキが木刀のみねで肩を叩いて呴いた。サモンと喧嘩した後すぐに戦つたはずなのに息をあげることもなく、さらにはあぐひまでしている。危機感の一つも感じていよいよ仕草だ。

「そうだな」

そう答えるハヤトも微動だにしない物腰で木刀を腰にしまう。

「すごいなお前ら、二人だけで返り討ちにするなんて！
少し離れて見ていたサモンが、小走りに近づいてきた。

「あんな力だけの奴らなら、百人来ても大丈夫だぜー。」

「イナバ……イヤなんでもない」

ハヤトは口走った言葉を書き消すように続けた。

「あいつらこの木刀を狙つてたけど、心当たりあるか?」

「いや、全くないぜ……。この剣のことを知ってるのも俺たちくら
いしか居ないからな」

手に持つた剣を不安げに見つめたヒロキは、首を振つて返事をする。

「隠し事か? オレにも教えてくれよー」

ひょこっと一人の間に割つて入つたサモンがうつむくヒロキの顔
を覗く。

「お、お前には関係ないだろ」

「けちー、教えてくれたつていいだろ!」

サモンは怒つてまたヒロキに飛び掛ろうとした。が、公園の入り
口から話し声が聞こえてきたので、ふと皿をそちらに向ける。

「ラクエルさん、こっちですぜ」

「随分寂れた場所にいるんですねえ」

さつきのゴロツキのリーダー格の男と、細身で長髪の優男が近づいて来る。細身の男は純白のカッターシャツを着て、腰に小太刀をぶら下げていた。髪は背中の真ん中辺りまでまっすぐ伸び、半分開いた目が不気味に光る。

「ほお、あの少年達があ?」

ラクエルと呼ばれた男が隣のゴロツキに確認する。

「そうです。しかし奴ら、中々手強くて」

「そうですかあ」

細身の男は腰に差した小太刀をゆっくりと抜く。刀身は銀白に輝き、つばは切つ先に向かつて獣の牙が伸びるように、四つの棘が生

えていた見慣れない形をしていた。

「それじゃ、お疲れさまでした」

「う、ラクエルさん、何を……？」

その光景を目撃したりにしたサモン達は戦慄した。

ドスッと鈍い音と共に、小太刀がゴロツキの腹を突き破り、つばに生える牙が食らいつく。

「う……が……！？」

「お疲れさまでした。そこでゆっくり休んでいてくださいなあ」ズボツと刀が抜かれると、五つの穴が空いた懐を押さえながら、血だらけのゴロツキがその場に倒れた。

「……何やつてんだ、あんた」

ヒロキが小さく呟く。それを聞き逃さなかつた男は、三人に向かつて軽くお辞儀をして挨拶した。

「お初にお目にかかります。私、ラクエルという者として、今日はある相談にい

「だから、何やつてんだよつ

「よせヒロキ、あいつはきっと貴族だ。手出ししたら只、じやすまないぞ……」

貴族。それは国を越えた権力を持つ血筋のことだ。力の大小はあるが貴族は全てにおいて一般市民より優遇され、国のルールも通じない、逆らえば簡単に殺される、暴君の総称だった。

「よくご存じですねえ」

ラクエルが濁つた瞳でハヤトを見据えて近づいてきた。

「ただ私は、ここに争いに来たわけではありません。いいですかあ？」

そう言つたラクエルはポケットから一枚の紙を取りだし、ボール

ペンと一緒にハヤトに差し出した。

「好きな額を書いて下さい。私が欲しいのはその鉄おも切り捨て
る木刀『洞爺湖』、最強の武人『白夜叉』が持つと言われている宝
剣ですよ」

「……あんたがゴロツキを雇つた親玉か」

「そうですが、使い物になりませんでしたねえ」

ハヤトは渡された紙を見た。そしてラクエルという残忍な貴族を。
隣で怒りを押し殺すヒロキとサモンを。

答えは一つしかなかつた。

「わりいな貴族さん、これは渡せねえ」

ビリビリと小さくちぎつた紙を投げ捨て、目の前にいる男に言い
放つ。

「これはあんたみたいなやつが持つていい刀じやないんだ」

一瞬の硬直のあと、ラクエルはふうとため息をついた。

「じゃあ頂きますねえ……命といつしょに」

貴族ラクエルの持つ小太刀は、血にぬれて真っ赤に染まつっていた。

風と氷と燃えない炎（前書き）

* 瀧先生の「Vivre toute ma vie」とのコラボをしています。

ハヤト、ヒロキは瀧先生の作られたキャラです。

風と氷と燃えない炎

ラクエルは無表情のままハヤトに突きを繰り出した。狙いは彼の脇腹ではなく、腰に差してある洞爺湖だった。

ハヤトはその攻撃に対し体の軸を横にずらす、と同時に抜刀することで受け流した。さらにそのままラクエルに対して胴に木刀を打ち込む。

がら空きの懷に吸い込まれるようにハヤトの胴打ちが見事に当たった。その手応えはハヤト自身もしっかりと感じていた。

しかし、

「効きませんねえ」

ラクエルは不気味に呟くと距離を空け、切られた脇腹を撫でさすりする。そこには不自然な氷の膜……いや、氷の鎧が作られていた。

「氷魔法か」

「ええ、強化すれば鉄より硬くなるんですよ？」

ラクエルはヘラヘラしながら左手を空中で動かした。その動作によつて氷塊が作られていく。

冷氣と共に形どられていつたのは三体の剣士だった。それぞれ長剣を片手に、鉄の鎧を着た男のような姿をしている。

「人形劇といきましょうかねえ」

氷の剣士はラクエルの言葉に応じて、それぞれハヤト、ヒロキ、サモンに襲いかかった。

ハヤトは氷の長剣を軽い身のこなしでかわすと、自身の木刀に意

識を集中させる。するとその刀の柄からかすかに風が吹き出した。

切つ先に向けて吹き出した風は、刃の切れ味を極限にまで高める。ハヤトの袈裟斬りは、氷の剣士を一刀両断にした。

「はあっ！」

ヒロキも彼と同じように刀に風を纏わせるが、それはハヤトのとは違つて竜巻のように、手元から刃を包み込む風だった。

氷の剣士は横に薙ぎ払われた木刀に吸い込まれ、削りとられるよう斬り捨てる。

「どーだバカ貴族」

「ううむ、見事ですねえ」

ラクエルは氷の剣士を軽々と倒されたと言つのに、へラへラと笑つて答えていた。

「何がおかしいんだ……？」

ヒロキは途中まで言いかけて気づいた。ラクエルの視線は自分達に向いていないことに。詳しく言つなら、ラクエルの意識は自分達の後ろにあることに。

「実に愉快ですねえ」

「……まさか、サモンつー？」

二人の後ろで、サモンだけは同じ相手にかなり苦戦していた。

一対一の戦闘で重要なのは、いかに自分の間合いで戦えるかと言うことだ。しかし、折れた剣を使うサモンにとって、それは容易なことではなかった。

相手の長剣を受けるので精一杯で斬りかかるどころか一步前に進むことすらできないサモンは、ただ避けては守るというのを繰り返す結果になっていた。

「今助けるぜ！」

「それはいけませんねえ」

サモンの前に飛び出そとヒロキが身構えたのを、ラクエルが指先を巧みに動かしてすぐさま氷の足枷を作り身動きを封じる。

「大人しくして下さいねえ」

ラクエルはそう言って、ハヤトにも同じ足枷をつけてしまう。両足が繋がれ、なおかつその足枷が地面に突き刺さっているために、二人は完全に身動きができなくなってしまった。

「……お前の狙いはこの木刀なんだろう？ サモンは関係ないし、なんでさつさと奪っていかねーんだ？」

キッヒラクエルを睨みながらハヤトが聞いた。それに対しても笑みを絶やさないラクエルは不気味に睨み返していく。

「私は武器コレクターである前に、剣士なのですよお。命と、その次に大事な刀を賭けた戦い……ゾクゾクするじゃあないですかぁ！」

ラクエルは壊れたように高笑いする。

「特に、チンピラ共を倒したくらいで自分を強いと過信している愚かなガキを、完膚なきまで叩きのめすなんて、最高級の楽しみですよねえ！」

「この腐れ貴族っ！！」

「あなた方も一人づつ、ゆっくり相手をしてあげますからあ……いやあ、楽しみですねえ！」

狂った貴族は最初のターゲットに、ニヤニヤとした視線を向けていた。

サモンは氷の長剣を紙一重でかわした。しかしそれは余裕で見切つたのではなく、ギリギリ交わすことができたという状態だった。それでもなお、敵の攻撃は止まらない。このままでは疲れ知らずの相手にいはずれ打ちのめされる サモンの脳裏にいやな想像が広がつていく。

そのとき自然と、左のポケットに手が伸びていた。

「ディノっ！」

ぐつと引き抜いた左手のカードを相手に見せ付けるように前へ突き出す。それはサモンの呼びかけに応じて紅く光り輝き、竜の姿をかたどった猛火が火砲のごとく飛び出した。目の前にいた氷の剣士はとっさに氷の盾を作ったようだが、猛火はその中心を貫いて敵を焼いた。

氷を溶かしきつた炎はその身にまとつた炎を一度吹き飛ばすために、空中で旋回したあと翼を激しく広げる。火の粉が舞う中にたたずむその姿は、紛れもなく伝説に存在する竜の姿だった。

「あの竜！？」

「サモンと初めて会つたとき乗つてた奴か」

ハヤトとヒロキが見上げた空には、確かにあの夜姿を見せた竜がいた。しかし竜はどこか弱々しく羽ばたいているように一人には見えていた。

ハヤトがとうさに隣のヒロキに耳打ちをする。

「あいつがいれば、サモンが勝てると思うか？」

「そ、そりやー火に包まれてもけろっとしてるし、見えないくらい高く飛べるし、あの貴族の作つた剣士を一撃で倒したんだから大丈夫だろ！」

「そりなりやいいが……」

ヒロキの言葉にもう一度サモンの姿を見るハヤト。氷の剣士と戦つただけというのに、彼は肩で息をしていて大量に汗をかいしている。どうも勝てるとは思えなかつた。

「サモンを助けに行くぞ」

「何言つてんだよ、行くつて足枷があるから身動き取れないじゃんかよ！」

ヒロキが両足を動かして見せた。しかし地面とがつちりつながつた氷が足首を完全につかんでいる。

「ならじゃんけんだ、負けたほうが足を斬つて助けに行く

「つてお前えええ！ 何某有名漫画の剣士っぽく言つてゐのー！？」

「こんな大事なときにボケてられるかつ！」

「お前だら馬鹿野郎おおおー！」

「まったくうるさい仲間さんですね、おまけにビーストティマー……ではないでしょうね、あなたの魔法は」

ラクエルが一人の掛け合いを横目でクスリと笑いながら、竜を従えたサモンに語りかける。サモンは額の汗を右肩の袖でぬぐいつゝだ戦いに集中した。

「ディノ、行くぞっ……！」

汗ばむ右手に折れた剣、左手に紅いカードを握り締め、敵に向かつて走り出す。

心と毒と燃えさかる炎

ポケットにカードを戻し、空いた左手は折れた剣の柄に添えて、サモンは全力でラクエルに斬りかかった。ラクエルは小太刀で難なく受けた……。いとも簡単にゼロ距離まで近づくことができた。これはサモンにとってかなり重要だった。もしラクエルが小太刀の間合いで戦ってきた場合、サモンは氷の剣士の時と同様、防戦一方になるのは確実。サモンに勝機があるとすればそれは、自分の刀が届く範囲まで近づき防戦になる前に決着をつける。これがサモンの出した最善の手だ。

「短期決戦はやめておいたほうがいいんじゃないですか？」

びくりとサモンの体が震える。
サモンが目を合わせようとすると、ラクエルとの身長差があつて見上げる形になつた。

「あなたは万に一つも勝ち目はないですよ。そんな折れた剣で、ここまで死ななかつた事が奇跡でしょ？」「なんだと！？」

サモンを見下したまま、ラクエルが毒を吐くよつて言葉を浴びせた。

「あなたは剣氣を飛ばす魔法すら使えない、ただの剣士まがいの子供ですよう。それどころか竜や仲間に助けを求めて、中途半端に飛び出して、最終的には迷惑だけかけて終わる。他に任せておけばいいのに、折れた剣で、子供に何ができるっていうんですか。そうなんですよ、力のないあなたにはそれしかできない。負けることし

かできない。勝てない。お前は勝てない。必ず負ける。お前は何をやつても勝てやしないのさー！」

なにかが砕けた気がした。

空には竜が待機させてある。田線で合図を送ればすぐにでも急降下してきて、援護の火球を吐き出してくれるだらう。だけど、どうしてもラクエルから目を逸らせなかつた。

「勝てない……？」

「ええ、ためしにこのまま続けてみましちゃうかあ」

ラクエルが「カツン」と剣のつばを当てたのを合図に、一人がまた動き出した。意識を取り戻したかのようにサモンが剣を振つて、ラクエルが受ける。振つて、受ける、流す。そうして何度も打ち合つていた時、サモンがちらりと横に目配せした。

「ディノ！」

サモンの声と同時に、左手側から赤い竜が突進した。後ろ足についた鉤爪がラクエルの背中を狙つて高速で低空飛行する。だがそれを、ラクエルは一瞬の反応で魔法を放つ。まず竜の目の前に氷の壁を作り上げ、さらに自分の右手に氷の盾と、体に鎧を。最後に、牙の生えた小太刀を左手で構えた。

竜の勢いは分厚い氷の壁すら簡単に鉤爪で壁をぶち壊す。しかし

その速度は明らかに遅くなつていて、ラクエルがそれを分厚い盾で受け止める。グラッと一瞬後ろへよろめいたラクエルはとっさにかとかから背中まで氷を出して体を支えた。勢いが完全に殺された竜は、そのまま構えられていた牙の餌食になる。

五本の牙が竜の体を貫いた。傷口からは血が流れ出る代わりに、強い光が漏れ出していた。そのまま竜は最後のうめき声を上げて、蚩の大群が飛び去るような光になつて消えた。

「うそ、だろ？」
「嘘じゃないですよ」

サモンは信頼していた仲間があっけなくやられてしまつたことと、敵に言われたように自分は役立たずだと思つてしまつたことで、その場に立つていられなくなつた。大きな絶望感につつまれた彼はただ、恐怖のまなざしで敵を見上げる。

「あなたのその顔、実にそそられますねえ……いい顔のまま逝かせてあげますねえ！」

ラクエルの左腕が引き下げる。切つ先は自分に向けられ、次の瞬間にはのど元が心臓か、どこかを貫かれる……。サモンはそのとき突然、死ぬことがすごく怖くなつた。兄と会えなくなること、リトルと旅をできなくなること、ディノの背中の上で、風を感じることができないこと。それらすべてをもうできないと思うと、心が叫び声を上げて、どうしようもない現状を覆す力がほしくなる。それから後はスローモーションのようだつた。

大丈夫だサモン、右手側に倒れて、すぐに起き上がるんだ
やさしくて暖かくて、すべて信頼できるような声。その声に身を任せてサモンは右に体を倒した。直後、小太刀がさつきまで左胸が

あつた場所を高速で突き抜け空を裂いた。

体を起こしたらすぐに剣を握つて、炎を纏わせるイメージを

するんだよ

手放さなかつた剣を真正面で構え、言われたとおりにイメージを膨らませる。折れた剣の根元から、小さな火が噴き出し始めた。

だ

ぐつと体の上に剣を振り上げ、ラクエルにぶつかる瞬間、爆発させるイメージを描いて。

「う、うむおおひがいのあめうつ。」

サモンは渾身の力を込めて剣を振り下ろした。折れた剣先は真紅の業火を纏い、斬りつけた傷口を瞬時に焼き焦がし、地面についた瞬間に炸裂しさらに敵を燃やす。

サモン、お前は何でもできる可能性を秘めてるんだぞ！
兄の声が、崩れたサモンの心をやさしく癒していった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2029r/>

召喚師の旅路

2011年11月6日03時17分発行